【ポスターセッション】 セッション2: オピオイド鎮痛物質 内因性抗鎮痛系の活性化に及ぼす通電鍼刺激の影響 **P8** <u>深澤洋滋</u>、岸岡史郎、前田武彦、清水典史、山本千鶴子、山本博之 和歌山県立医科大学薬理学教室 Effects of electroacupuncture on the activation of endogenous anti-analgesic system in rats Yohji Fukazawa, et al, Department of Pharmacology, Wakayama Medical University 64-68 Ρ9 U50488Hによる熱性痛覚過敏の機序 - µ及び ORL1 受容体との関連の検討 -<u>関山裕詩</u>¹、内海 潤²、角田俊信¹、花岡一雄¹ ¹東京大学医学部附属病院麻酔科・痛みセンター、² 東レ株式会社医薬企画部 Thermal Hyperalgesia Following Peripheral U50488H Administration Is Not Mediated by µ-opioid or ORL1 Receptors Systems, Hiroshi Sekiyama, et al, Department of Anesthesiology and Pain Relief Center, The University of Tokyo Hospital 69-72 神経傷害モデルマウスにおける末梢性モルヒネ鎮痛効果の欠如 P10 川島敏子、植田弘師、井上誠 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科分子薬理学研究室) Lack of peripheral morphine analgesia in nerve injury type of neuropathic model mice Toshiko Kawashima, et al, Division of Molecular Pharmacology and Neuroscience, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences 73-75 エンドモルフィン誘発性抗侵害作用における D-Pro²-エンドモルフィンの P11 選択的拮抗性について 櫻田 忍¹、内山弘子¹、渡邊広行¹、溝口広一¹、藤村 努、村山季美枝、櫻田 司² 1東北薬科大学機能形態学教室、順天堂大学医学部、2第一薬科大学生化 Endomorphins analogues containing D-Pro² antagonizes endomorphin antinociception in mice Shinobu Sakurada, et al, Department of Physiology and Anatomy, Tohoku Pharmaceutical University 76-80 P12 モルフィンの副作用におけるモルフィンとモルフィノンの比較 石田 隆、大石哲也、塚原邦浩、山野 茂、竹之下玲子、喜多秀樹、土岐 智 福岡大学薬学部衛生科学教室 Possible involvement of morphinone in appearance of side effects of morphine Takashi Ishida, et al, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Fukuoka University 81-84 P13 モルヒネとモルヒネ-6-グルクロナイドの脳室内投与後の脳内分布の相違 黄倉 崇、込山則行、齋藤正典、藤井亜紀、中西美智、山田静雄、木村良平 静岡県立大学薬学部薬剤学教室 Differential brain distribution of morphine and morphine-6-glucuronide after the intracerebroventricular injection in rats, Takashi Okura, et al, Department of Biopharmacy, School of Pharmaceutical Sciences, University of Shizuoka 85-89 P14 ラビット手術麻酔モデルの開発 - 超短時間作用性 µ-agonist, remifentanil による検討 -林田眞和、福永篤翁、目野亜希、関山祐詩、有田英子、花岡一雄 東京大学医学部附属病院麻酔科・痛みセンター A rabbit model for the study of surgical anesthesia-Validation with ultra-short acting μ-agonist : remifentanil-, Masakazu Hayashida , et al, Department of Anesthesiology and Pain Relief Center, The University of Tokyo Hospital 90-95 P15 超短時間作用性 µ -agonist: remifentanil の急性耐性発現 - ラビットモデルにおける検討 -<u>林田眞和</u>、福永篤翁、目野亜希、関山祐詩、有田英子、花岡一雄 東京大学医学部附属病院麻酔科・痛みセンター Acute tolerance development in ultra-short acting µ-agonist : remifentanil in a rabbit model of surgical anesthesia/analgesia -, Masakazu Hayashida et al, epartment of Anesthesiology and Pain Relief Center, The University of Tokyo Hospital 96-99

内因性抗鎮痛系の活性化に及ぼす通電鍼刺激の影響

深澤洋滋、岸岡史郎、前田武彦、清水典史、山本千鶴子、山本博之 和歌山県立医科大学 薬理学教室

Effects of electroacupuncture on the activation of endogenous anti-analgesic system in rats

Yohji Fukazawa, Shiroh Kishioka, Takehiko Maeda, Norifumi Shimizu, Chizuko Yamamoto, Hiroyuki Yamamoto Department of Pharmacology, Wakayama Medical University

Several lines of evidence imply that there exists an endogenous anti-analgesic Summary: system which is involved in the modulation of opioid analgesia. In this experiment, we designed to evaluate the site and the duration of anti-analgesic action induced by electroacupuncture (EA), and the effects of N-methyl-D-aspartate (NMDA) receptor antagonist, MK-801, on the anti-analgesic effect. Male Sprague-Dawley rats were exposed to EA (ST-36 or LI-4; 0.1-msec duration at 3 Hz for 45 min), and pain thresholds were assessed by the hind-paw pressure test. The analgesic effect of subcutaneous morphine following EA was significantly attenuated while the electrical stimulation applied to non-acupoint showed no reduction of the analgesia. The attenuation was inversely proportional to the time-interval between EA and morphine injection. When morphine was injected at 120 min after the termination of EA, the anti-analgesic effect induced by EA completely diminished. The analgesic effect of intrathecal, but not intracerebroventricular, morphine was attenuated by EA. The pretreatment with intrathecal MK-801 not only diminished EA-induced antinociception, but also inhibited the attenuation of intrathecal morphine analgesia following the EA. These results suggest that the spinal cord plays a crucial role in the anti-analgesic system induced by EA stimulation, and the NMDA receptor may be involved in the activation of EA-induced anti-analgesic system.

緒言

オピオイドの鎮痛作用を減弱させる内因性物質として、コレシストキニン、 Phe-Met-Arg-Phe (FMRF)アミド、ダイノルフィンおよびノシセプチンなどが報告され、生体内に内因性抗鎮痛系が存在することが示唆されてきた¹⁾。この内因性抗鎮痛系の生理学的意義についてはオピオイドの耐性形成に関与する可能性が考えられているが²⁾、その活 性化の機序については明らかにされていない。 われわれはこれまで、電撃フットショックス トレスにより内因性オピオイド系が関与する 抗侵害刺激作用が惹起されるのみでなく、そ の後、一過性にモルヒネ鎮痛が減弱すること を明らかにし³⁾、内因性オピオイド系の賦活 化と内因性抗鎮痛系の活性化の間には密接な 関係が存在する可能性を示唆してきた。一方、 内因性オピオイド系が関与する抗侵害刺激作 用が経穴通電鍼刺激により惹起されることが 知られているが^{4,5)}、これまで経穴通電鍼刺激と内因性抗鎮痛系の関係についての検討はされてない。

一次感覚神経に含有されている興奮性神 経伝達物質のグルタミン酸が N-methyl-D -aspartate(NMDA)受容体を介して痛み情報 の伝達に関与し、NMDA受容体が脊髄後角神経 に高密度に分布することが明らかにされてい る⁶⁾。また、抗鎮痛作用を有するノシセプチ ンの受容体欠損マウスでは、モルヒネ鎮痛に 対する耐性形成能の減弱が認められているが ⁷⁾、この NMDA受容体の拮抗薬がモルヒネ鎮痛 に対する耐性形成を抑制することが報告され ている⁸⁾。これらの結果は、NMDA受容体が脊 髄での抗鎮痛系活性化に関与している可能性 を示唆するものである。

そこで今回、経穴通電鍼刺激と内因性抗鎮 痛系の関係、ならびに内因性抗鎮痛系に及ぼ す NMDA 受容体拮抗薬(MK-801)の影響につい て検討した。

実験方法

実験には Sprague-Dawley 系雄性ラット (250 350 g)を使用した。

側脳室内投与のために、ペントバルビター ル麻酔下に、定位脳固定装置にラットを固定 し、bregma から外側 2 mm、尾側 1 mm の頭蓋 表面にガイドカニューレを前もって植え込ん だ。側脳室内投与は、1週間の回復期間の後、 ガイドカニューレを介してインジェクション カニューレを頭蓋表面から5mm下方に挿入し、 投与液量 10 I を 30 秒間で注入することに よって行った。脊髄くも膜下腔内(i.t.)投 与は、ペントバルビタール麻酔下に、第2・ 第3腰髄の椎間よりカニューレ(SP10)を吻 側に2cm挿入固定し、1週間の回復期間の後、 | とカニューレ内洗浄用の生理食 薬液 5 塩液 14 |を 30 秒間で注入することにより 行った。実験終了後、同じ手法で色素を注入 し、正確に薬物が投与されていることを確認

した。

鎮痛作用の測定は後肢加圧法に従い、天秤 式加圧装置を用いて後肢足背部を加圧し、足 を引くか、またはもがき行動を指標として痛 覚閾値圧(重量;g)を15分間隔で測定した。 後肢の組織損傷を防ぐため、最大負荷重量は 1500gとした。鎮痛効果の指標は、痛覚閾値 の経時変化および鎮痛曲線下面積(AUC)とし た。

通電鍼刺激は、左右の経穴相当部位または 非経穴部位に鍼灸用ステンレス鍼を刺入し、3 Hz、0.1msec duration の条件下で45分間通 電することによりおこなった。経穴相当部位 として前脛骨筋上部1/3(ヒト足三里穴相当 部位:ST-36)および第1背側骨間筋中央部(ヒ ト合谷穴相当部位:LI-4)を、非経穴部位と しては大殿筋中央部を用いた。

モルヒネの投与量は、皮下投与では 7 mg/kg、 側脳室内投与では 25 g、i.t.投与では 10

gとした。通電鍼刺激終了15分後にそれぞ れの投与経路でモルヒネを投与し、モルヒネ 鎮痛に及ぼす経穴または非経穴通電鍼刺激の 影響を検討した。経穴通電鍼刺激の抗鎮痛作 用に及ぼす通電鍼刺激-モルヒネ投与間隔の 影響は、モルヒネの投与時間を通電鍼刺激終 了0分後、15分後、30分後、60分後または 120分後として検討した。また、MK-801は、 皮下投与では通電鍼刺激開始15分前(0.1 mg/kg)に、i.t.投与では通電鍼刺激直前(3.0

g)およびモルヒネ投与直前(1.5 g)に 処置し、経穴通電鍼刺激による抗侵害刺激作 用および抗モルヒネ鎮痛作用に及ぼす MK-801の影響を検討した。

結果

1. 経穴通電鍼刺激による抗侵害刺激作用

ST-36 の通電鍼刺激により痛覚閾値が徐々 に上昇し、刺激開始30分後には痛覚閾値上昇 が最大となり、それが刺激終了まで持続した。 刺激終了後、痛覚閾値は徐々に下降し、15分後には通電鍼刺激前の閾値にまで回復した (Fig. 1)。LI-4 通電鍼刺激においても同様



Fig. 1. The time course of the electroacupuncture (EA)-induced antinociception and morphine s.c. analgesia estimated by the hind-paw pressure test. EA was applied to acupoints (ST-36 or LI-4; 0.1-msec duration at 3 Hz for 45 min). Morphine (7 mg/kg, s.c.) was administrated at the point indicated by an arrow. Each point represents the mean and vertical bars indicate the S.E.M. *P < 0.05, **P < 0.01 vs. open circle.

な痛覚閾値の上昇および回復が観察され、両 者の痛覚閾値の経時変化および AUC に差は認 められなかった。しかし、非経穴刺激により 痛覚閾値は上昇しなかった。

2. 経穴通電鍼刺激後のモルヒネ鎮痛

モルヒネ 7 mg/kg 皮下投与により、投与 30分 45分後を最大とし、120分後にはコン トロール値に回復する鎮痛作用の経時変化が 認められた。ST-36 通電鍼刺激による抗侵害 刺激作用消失後、すなわち経穴通電鍼刺激終 ^{ofg} 15 分後に皮下投与したモルヒネの鎮痛作 患は、通電鍼刺激を行わずに皮下投与したモ ルヒネの鎮痛作用に比べ有意に減弱した(Fig. 1)。この経穴通電鍼刺激後のモルヒネ鎮痛は、 最大鎮痛効果の抑制として観察されたが、鎮 痛作用の経時変化は影響を受けなかった。

LI-4 通電鍼刺激後においても、皮下投与モ ルヒネの鎮痛作用が減弱し、その減弱の程度 および経時変化は ST-36 通電鍼刺激後のそれ とほぼ同様であった。一方、非経穴刺激後の 皮下投与モルヒネの鎮痛作用の経時変化およ び AUC は、通電鍼刺激を行わず皮下投与した



Fig. 2. Various time intervals between electroacupuncture (EA) stimulation and morphine administration. Morphine (7 mg/kg, s.c.) was administered at 0 – 120 min after the termination of EA stimulation. Analgesic effect was expressed as the area under the pain threshold curve (AUC). EA was applied by the stimulation of ST-36 point (0.1-msec duration at 3 Hz for 45 min). Each column represents the mean \pm S.E.M. of 6 animals. **P < 0.01 vs. open column.

モルヒネの鎮痛作用のそれらとの間に差は認められなかった。

3. 経穴通電鍼刺激-モルヒネ投与間隔

ST-36 通電鍼刺激後のモルヒネ鎮痛(皮下 投与)減弱作用における通電鍼刺激-モルヒネ 投与間隔の関係について検討した。ST-36 通 電鍼刺激によるモルヒネ鎮痛減弱作用は、通 電鍼刺激&了直後のモルヒネ投与が最も強く、 通電鍼刺激-モルヒネ投与間隔が延長するに 従って徐々に鎮痛作用が回復した(Fig.2)。 通電鍼刺激終了120分後のモルヒネ投与によ る鎮痛作用は、通電刺激を行わないコントロ ールのモルヒネの鎮痛作用と差は認められず、 抗鎮痛作用は完全に消失した。

4. モルヒネ投与経路

経穴通電鍼刺激によるモルヒネ鎮痛減弱作 用とモルヒネ投与経路の関係を検討した。 ST-36 通電鍼刺激終了 15 後に i.t.投与(10

g)したモルヒネの鎮痛作用は有意に減弱されたが、脳室内投与(25 g)したモルヒネのそれは減弱されなかった(Fig. 3)。LI-4 通電鍼刺激によっても i.t.投与モルヒネの 鎮痛作用は減弱されたが、脳室内投与モルヒ ネのそれは影響を受けなかった。



Fig. 3. Electroacupuncture (EA)-induced anti-analgesic effects on morphine and the routes of morphine administration. Morphine (10 g, i.t. or 25 g, i.c.v.) was administrated 15 min after the termination of EA stimulation. Analgesic effect was expressed as the area under the pain threshold curve (AUC). EA was applied to acupoints (ST-36 or LI-4; 0.1-msec duration at 3 Hz, for 45 min). Each column represents the mean \pm S.E.M. of 6 to 9 animals. ***P* <0.01 vs. open column.

5. NMDA 受容体拮抗薬 (MK-801)

経穴通電鍼刺激による抗侵害刺激作用お よびモルヒネ鎮痛減弱作用に及ぼす MK-801 の影響について検討した。MK-801 の i.t. (3.0 g+1.5 g)処置により、0.3 1 mg/kg 皮下投与時にみられる異常行動(head weaving, circling behavior など)は惹起さ れなかった。

MK-801 の 3 g を通電鍼刺激直前に i.t. 処置すると、ST-36 通電鍼刺激による抗侵害 刺激作用はほぼ完全に消失した(Fig. 4 A お よび B)。ST-36 通電鍼刺激は、i.t.投与によ るモルヒネ鎮痛を有意に減弱し、Fig. 3 の結 果と一致した。MK-801 の i.t.処置により、i.t. 投与モルヒネの鎮痛作用は有意ではないが減 弱される傾向にあった。ST-36 通電鍼刺激に MK-801 の i.t.処置を併用した後の i.t.投与 モルヒネの鎮痛作用は、MK-801 の i.t.処置後 の i.t.投与モルヒネのそれとの間に有意な 差はなく、逆に、MK-801 の処置をしていない 通電鍼刺激後のモルヒネ鎮痛よりも、やや強 く鎮痛作用が出現する傾向にあった(Fig. 4A



Fig. 4. Effects of MK-801 on electroacupuncture (EA)-induced anti-analgesic effects. A: The time course of the EA-induced antinociception and morphine (Mor) i.t. analgesia estimated by the hind-paw pressure test. B: The area under the pain threshold curve (AUC) of EA-induced antinociception. C: AUC of morphine analgesia. Morphine (10 g, i.t) was administrated 15 min after the termination of EA stimulation. Rats were pretreated with MK-801 (3.5 g, i.t.) just before EA and morphine (10 g, i.t.) was administered in combination with MK-801 (1.5 g, i.t.) 15 min after EA. EA was applied to ST-36 point (0.1-msec duration at 3 Hz for 45 min). Each point represents the mean and vertical bars indicate the S.E.M and each column represents the mean \pm S.E.M of 6 to 7 animals. B: ***P* <0.01 vs. filled column. C: ***P* <0.01 vs. open column.

およびC)。

考察

 金穴部位(ST-36またはLI-4)の通電鍼刺激による痛覚閾値上昇は、通電開始30分後に 電鍼刺激終了後も鎮痛作用は徐々に減弱して 電鍼刺激終了後も鎮痛作用は徐々に減弱して でするものの、完全に回復するには約15分間必要とした。また、この経穴通電鍼刺激による 抗侵害刺激作用は、オピオイド拮抗薬である ナロキソン処置により消失することから⁹⁾、 通電鍼刺激による痛覚閾値上昇には、内因性 オピオイドペプチドの関与が示唆されている。 この抗侵害刺激作用は、非経穴刺激では惹起 されないので、これら経穴刺激に特異的な反 応であると考えられる。

経穴通電鍼刺激によりモルヒネ皮下投与 による鎮痛作用は減弱されたが、非経穴刺激 ではその減弱は認められなかった。この経穴 通電鍼刺激によるモルヒネ鎮痛減弱作用は、 通電鍼刺激-モルヒネ投与間隔に逆相関し、通 電鍼刺激終

了 120 分後のモルヒネ投与では鎮痛作用の減 弱が認められなかった。これらの結果は、経 穴通電鍼刺激により一過性に活性化する内因 性抗鎮痛系が存在することを示唆するもので あり、遊離された内因性オピオイドペプチド が抗鎮痛系の賦活に関与しているのかもしれ ない。この経穴通電鍼刺激後のモルヒネ鎮痛 の減弱作用は、モルヒネの i.t.投与により惹 起されたが、脳室内投与では認められず、経 穴通電鍼刺激による内因性抗鎮痛系の活性化 には、脊髄上部ではなく、脊髄が重要な役割 を果たしているようである。

経穴通電鍼刺激による抗侵害刺激作用は、 NMDA 受容体拮抗薬である MK-801 の i.t.処置 によりほぼ完全に消失したことから、経穴通 電鍼刺激による抗侵害刺激作用の発現には、 NMDA 型グルタミン酸受容体が関与している と考えられる。モルヒネ i.t.投与による鎮痛 作用は、MK-801 の i.t.処置により減弱傾向に あり、外因性オピオイドの鎮痛作用発現にも NMDA 受容体が関与するとの報告に一致する ¹⁰⁾。この MK-801 処置後のモルヒネ鎮痛に比し、 MK-801 処置に経穴通電鍼刺激を併用すると、 それ以上の有意なモルヒネの鎮痛は減弱は認 められず、経穴通電鍼刺激後のモルヒネ鎮痛 減弱作用には、NMDA 型グルタミン酸受容体が 関与している可能性が考えられる。

以上の結果より、脊髄には経穴通電鍼刺激 により一過性に活性化される内因性抗鎮痛機 構が存在し、その活性化には、NMDA 型グルタ ミン酸受容体が関与している可能性が示唆さ れた。

引用文献

- Wiesenfeld-Hallin Z, de Arauja Lucas G, Alster P, Xu XJ, Hokfelt T. Cholecystokinin/opioid interactions. Brain Res. 848(1-2):78-89, 1999
- 2. Rothman RB. A review of the anti-opioid peptide in morphine tolerance and dependence. Synapse. 12(2):129-138, 1992
- Kishioka S, Maeda T, Fukunaga Y, Shimizu N, Miyamoto M, Fukazawa Y, Yamamoto H. Effect of foot-shock stress on morphine analgesia, tolerance and physical dependence in adrenalectomized rats. Jpn J Pharmacol. 82, Suppl. I, 159P, 2000
- Huang C, Wang Y, Chang JK, Han JS. Endomorphin and mu-opioid receptors in mouse brain mediate the analgesic effect induced by 2 Hz but not 100 Hz electroacupuncture stimulation. Neurosci Lett. 294(3):159-162, 2000
- Kishioka S, Miyamoto Y, Nishida S, Fukunaga Y, Yamamoto H. Effect of a mixture of peptidase inhibitors (amastatin, captopril and phosphoramidone) on Met-enkephalin-, -endorphin-, dynorphin-(1-13)- and electroacupuncture-induced antinociception in rats. Jpn J Pharmacol. 66: 337-345, 1994
- Coggeshall RE, Carlton SM. Receptor localization in the mammalian dorsal horn and primary afferent neurons. Brain Res Rev. 24: 28-66, 1997
- Ueda H, Yamaguchi T, Tokuyama S, Inoue M, Nishi M, Takeshima H. Partial loss of tolerance liability to morphine analgesia in mice lacking the nociceptin receptor gene. Neurosci Lett. 237(2-3): 136-138, 1997
- Trujillo KA, Akil H. Inhibition of morphine tolerance and dependence by the NMDA receptor antagonist MK-801. Science. 251(4989): 85-87, 1991
- Mayer DJ, Price DD, Raffi A. Antagonism of acupuncture analgesia in man by the narcotic antagonist naloxone. Brain Res. 121: 368-372, 1977
- 10. Heinricher MM, Schouten JC, Jobst EE. Activation of brainstem *N*-methyl-D-aspartate receptors is required for the analgesic actions of

morphine given systemically. Pain. 92(1-2):129-138, 2001

U50,488H による熱性痛覚過敏の機序

- 及び ORL1 受容体との関連の検討-

関山裕詩、内海潤^{*}、角田俊信、花岡一雄 東京大学医学部附属病院麻酔科・痛みセンター 東レ株式会社医薬企画部^{*}

Thermal Hyperalgesia Following Peripheral U50488H Administration Is Not Mediated by µ-opioid or ORL1 Receptors Systems

Hiroshi Sekiyama, Jun Utsumi^{*}, Toshinobu Sumida, Kazuo Hanaoka Pain Relief Center, Department of Anesthesiology, Faculty of Medicine, University of Tokyo, Tokyo, Japan ^{*}Clinical Research Dept., Toray Industries, Inc.Tokyo, Japan

Summary: Evidence for the importance of peripheral opioid analgesic action is mounting, especially in inflamed tissues. However, we have observed evidence of thermal hyperalgesia following peripheral [kappa]1-opioid agonist administration. One hypothesis is that thermal hyperalgesia following peripheral [kappa]1-opioid agonist administration may be mediated by [mu]-opioid or ORL1 receptors systems. In this study, we investigated the role of [mu]-opioid or ORL1 receptors systems in the thermal hyperalgesia induced by peripheral [kappa]1-opioid administration.

With approval of our Animal care and Use Committee, we used a modified Hargreaves test device to measure withdrawal latencies to radiant heat stimulation of thermally injured rat hind paw. Under halothane anesthesia, thirty animals received an intraplantar injection of 120 [mu]g of nor-BNI (a specific [kappa]1-opioid receptor antagonist; n=10), 30 n mole of [F/G]NC ([Phe1 [PSI] (CH₂.NH)Gly²]-nociceptin-(1-13)NH₂, an ORL1 receptor antagonist; n=10), or 1 n mole of CTOP (a specific [mu]-opioid receptor antagonist; n=10), 30min before intraplantar injection of 250 n mole U50 (U50,488H, a specific [kappa]1-opioid receptor agonist) in a volume of 20 [mu]l of 10%DMSO. Twenty animals received vehicles (distilled water or Sterile 0.9% physiologic saline; each group n=10), 30min before intraplantar injection of U50. Halothane was discontinued and withdrawal latencies were tested every 15 minutes for two hours. Data was also presented as a difference score (DS), that is, the latency time of the normal paw subtracted from the latency time of the tested paw. Negative DS indicated the presence of hyperalgesia. Repeated measure ANOVA followed by Bonferroni test was used for statistical analysis.

Thermal hyperalgesia following peripheral [kappa]1-opioid agonist, U50 was prevented by the pre- administration of peripheral nor-BNI(DS; -1.5 sec). Peripheral [F/G]NC and CTOP did not prevent the thermal hyperalgesia following peripheral U50 (DS; -9.1 sec and -8.2, respectively). Vehicles (distilled water and sterile 0.9% physiologic saline) did not have any effects on the thermal hyperalgesia following peripheral U50 (DS; -8.7 sec and -9.2, respectively).

It has been reported that the ORL1 receptor agonist, nociceptin indirectly stimulates nerve endings of nociceptive primary afferent neurons through a local SP release or that [mu]-opioid receptor activation leads to a sustained increase in

glutamate synaptic effectiveness at the N-methyl-D-aspartate receptor level, a system associated with central hypersensitivity to pain. However, the present study demonstrates that thermal hyperalgesia following peripheral [kappa]1-opioid agonist administration is not mediated by [mu]-opioid or ORL1 receptors systems.

緒言

近年、末梢オピオイド受容体を介した鎮痛 効果に関する知見が集積しつつある。特に炎 症下での有効性を示唆する報告が多い¹⁻⁴。 受容体作動薬のみならず⁵κ-受容体作動薬の 末梢鎮痛効果も認められている⁶。しかし、一 方で opioid-induced hyperalgesia について の報告も散見され⁷、末梢性κ1 受容体も熱性 痛覚過敏に関与するという⁸。今回この末梢性 熱性痛覚過敏の機序が 受容体あるいは ORL1 受容体を介したものであるかを検討した。

実験方法

体重 300 350g の雄性 SD 系ラットに 2 日間各 2 時間の baselining を施行した。その後右足 底に熱傷(56度10秒)を加えた。24 時間後 Hargreaves box にて右-左足底逃避潜時差 (difference score: DS)を測定し-1.5 秒以下 の場合を痛覚過敏ラットとした。その後、 受容体拮抗薬(1 n mole,CTOP), к1 受容体拮 抗薬(120 µg, nor-BNI), ORL1 受容体拮抗薬 (30 n mole, [F/G]NC ([Phe1 [PSI] (CH₂.NH)Gly²]-nociceptin-(1-13)NH₂)の各々 前処置 30 分後、к1 選択的作動薬 U50488H,250 n mole を右足底に皮内注し、熱刺激による DS を 15 分毎 2 時間測定した(図)⁹。なお、拮 抗薬の溶媒として蒸留水及び生理食塩水を用 いた。

統計処理には repeated ANOVA を用い、有意 差が認められた場合 Posthoctest (BonferroniProcedure)を施行した。P<0.05 にて有意差ありと判定した。

METHODS

Experimental Procedure



結果

蒸留水及び生理食塩水で前処置したのち U50 を皮内注した群の DS は各々-8.7±4.3 (秒)、9.2±2.7(秒)であった。nor-BNI で前処置したのちU50 を皮内注した群の DS は -1.5±3.5(秒)であった。一方 ORL1 受容体 拮抗薬及び CTOP で前処置したのちU50 を皮内 注した群の DS は各々-9.1 ±4.9(秒)、8.2 ±3.0(秒)であった。以上の値は各群での最 小の DS で全て 15 分値であった。

考察

最近、中枢や末梢に限らず opioid-induced hyperalgesia あるいは opioid-induced pain の報告が散見される^{7,8}。また、末梢性 受容 体が末梢鎮痛のみならず痛覚過敏にも関与し ている可能性が示唆されている。ORL1 受容体 作動薬 nociceptin は間接的に一次求心性 ニューロン神経終末から Substance P を放出 することで痛覚過敏を起こす¹⁰。またμ受容体 においても Fentanyl は NMDA 受容体を介した 痛覚過敏を起こす¹¹。

以前我々も熱性痛覚過敏モデルにおいて U50,488Hを末梢投与した場合のが痛覚過敏を もたらすことを認めた。そこで「U50,488Hの 末梢性熱性痛覚過敏の機序が 受容体あるい は ORL1 受容体を介したものである。」という 仮説を立て検討した。

今回の結果より、U50,488Hの末梢投与によ る熱性痛覚過敏は 受容体拮抗薬、ORL1 受容 体拮抗薬により影響を受けなかった。

結語

熱性炎症ラットにおいて末梢к1受容体によ る熱性痛覚過敏には ORL1 及びµ受容体系は 関与していないことが示唆された。

参考文献

- 1. Stein C: The control of pain in peripheral tissue by opioids. N Engl J Med 332: 1685-90,1995
- Coggeshall, R.E., Carlton SM. Receptor localization in the mammalian dorsal horn and primary afferent neurons. Brain Research -Brain Research Reviews 24:28-6, 1997.
- Stein C, Comisel K, Haimerl E, Yassouridis A, Lehrberger K, Herz A, Peter K: Analgesic effect of intraarticular morphine after arthroscopic knee surgery. N Engl J Med 325: 1123-6,1990
- Likar R, Sittl R, Gragger K, Pipam W, Blatnig H, Breschan C, Schalk HV, Stein C, Schafer M: Peripheral morphine analgesia in dental surgery. Pain,76:45-50,1998
- Nozaki-Taguchi N, Yaksh TL: Characterization of the antihyperalgesic action of a novel peripheral μ-opioid receptor agonist-loperamide. Anesthesiology 90: 225-34,1999
- Ko MC, Butelman ER, Woods JH: Activation of peripheral opioid receptors inhibits capsaicin-induced thermal nociception in rhesus monkeys. J Pharmacol Exp Ther 289: 378-85, 1999
- Colpaert FC., Mechanisms of opioid-induced pain and antinociceptive tolerance: signal transduction. Pain, Feb;95(3):287-8, 2002
- Machelska H, Pfluger M, Weber W, Piranvisseh-Volk M, Daubert JD, Dehaven R, Stein C: Peripheral effects of the κ-opioid agonist EMD 61753 on pain and inflammation in rats and humans. J Pharmacol Exp Ther 290:354-61,1999
- Collins JG, Shimada SG: Effects of a peripherally limited mu opiate agonist (ADL-2-1294) on hyperalgesia resulting from thermal injury. APS Meeting Abstract,134, 1998

- Inoue M, Kobayashi M, Kozaki S, Zimmer A, Ueda H, Nociceptin/orphanin FQ-induced nociceptive responses through substance P release from peripheral nerve endings in mice.Proc Natl Acad Sci U S A, Sep 1;95(18):10949-53, 1998
- 11. Celerier E, Rivat C, Jun Y, Laulin JP, Larcher
 A, Reynier P, Simonnet G,Long-lasting
 hyperalgesia induced by fentanyl in rats:
 preventive effect of ketamine.,
 Anesthesiology,92(2):465-72, 2000

神経傷害モデルマウスにおける 末梢性モルヒネ鎮痛効果の欠如

川島敏子、井上誠、植田弘師 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科分子薬理学研究室

Lack of peripheral morphine analgesia in nerve injury type of neuropathic model mice

Toshiko Kawashima, Makoto Inoue and Hiroshi Ueda Division of Molecular Pharmacology and Neuroscience Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Summary : In clinic, neuropathic pain is reported insensitive to morphine. However, the mechanism of this morphine-insensitivity is not clear. Here, we demonstrate a possible mechanism of morphine-insensitivity to bradykinin (BK)-induced nociception after partial sciatic nerve injury by use of algogenic-induced nociceptive flexion test in mice. Intraplantar (i.pl.) injection of bradykinin induced dose-dependent nociceptive flexion responses in mice. After nerve injury, the dose-response curve of bradykinin were shifted at about 100 times lower doses. Peripheral morphine treatment (i.pl.) completely inhibited the BK-responses in sham-operated mice while it had no effect on the BK-induced nociception in nerve-injured mice. In sham-operated mice, the BK-induced nociception was blocked by intrathecal NK1 receptor antagonist, CP-99994. However, in nerve-injured mice, MK-801, but not CP-99994 blocked the BK-induced nociception suggesting a switch in spinal neurotransmitter for BK-nociception after injury. Neonatal capsaicin treatment, which degenerates small diameter primary afferents, abolished the BK-induced nociceptive responses in sham-operated mice, but not in injured ones further indicating a change in fiber type that mediates BK-nociception after injury. Pharmacological characterization by use of specific antagonists revealed that BK-responses in sham-operated mice were mediated through B2 receptor, while that in injured mice through B1 receptor. Altogether, these findings suggest that loss of morphine analgesia to BK-nociception after nerve injury could be attributed to the functional switch of fiber types that mediate BK-responses.

緒言

神経因性疼痛は難治性の慢性疼痛症候で、帯状疱疹後 神経痛、カウザルギー、三叉神経痛、糖尿病性神経炎な どをはじめ数多く認められる。しかし、最も強力な鎮痛 薬として知られるモルヒネでさえも十分な鎮痛効果を示 さないことが知られており、未だ理想的な治療薬が存在 しないのが現状である。 今回、坐骨神経部分結紮マウスを用いて発痛物質誘発性 屈曲反射試験(ANF試験)を行い、末梢性モルヒネ鎮痛 効果の欠如とそのメカニズムを解析した。

実験方法

発痛物質誘発性屈曲反射試験(ANF試験)¹⁾ マウスを布製の袋に入れ、布にあけた穴から四肢を出し それぞれの肢に糸を取り付けた。右後肢に取り付けた糸 はアイソトニックトランスデューサーに連結し、それに 接続されたレコーダーを利用して屈曲反射の軌跡を記録 した。他の三肢に取り付けた糸は床に固定しマウスを空 中に浮かせた状態で保持した。マウスの右後肢足蹠皮下 にカニューレを挿入しこれより薬物を投与し数秒以内に 生じる屈曲反応を侵害反応として評価した。

結果

当研究室では ANF 試験を用いて、神経線維の種類と脊 髄における伝達物質から、一次知覚神経線維を3種類に 分類した。サブスタンス P(SP), ノシセプチン(N/OFQ), ブラジキニン(BK)によって刺激される Type1 は脊髄で NK-1 受容体を駆動する C 線維、ATP によって刺激され る Type2 は NMDA 受容体を駆動する C 線維、プロスタ グランジン 12 (PGI2)によって刺激される Type3 はカプ サイシン非感受性線維であり脊髄で NMDA 受容体を駆 動する。坐骨神経部分結紮1週間を経たマウスにおいて、 SP、N/OFQなどのType1反応は消失し、Type2反応はSham 群と比較して変化が見られず、Type3 は 100 1000 倍も の低用量で Sham 群と同程度の反応を示し、すなわち過 敏応答が認められた。ところが、Type1 を刺激する発痛 物質の中で唯一ブラジキニン(BK)のみは、坐骨神経部 分結紮マウスにおいて反応の消失が認められず、Type3 反応同様の過敏応答を示した。Sham 群における BK 誘発 性屈曲反応は足蹠皮下投与したモルヒネによって完全に 抑制された。この反応は、足蹠皮下投与した B2 受容体拮 抗薬、脊髄くも膜下腔内投与した NK1 受容体拮抗薬、新 生時カプサイシン処置によっても完全に抑制された。一 方、坐骨神経部分結紮マウスにおける BK 反応はモルヒ ネによりほとんど抑制されなかった。更にこの反応は、 Sham 群では全く影響を受けなかった B1 受容体拮抗薬と NMDA 受容体拮抗薬によって完全に抑制され、新生時力 プサイシン処置による影響は無かった。

考察

本研究の結果から、神経傷害時には Type1 神経を介す る反応が消失し、それに伴って Type3 反応が過敏となる ことが示された。坐骨神経部分結紮マウスにおいて SP 含 有一次知覚神経線維の退縮が生じること²⁰、また神経損傷 により A 線維の sprouting が起こり脊髄後角の深層から表 層への新たな侵入が起こること³³が報告されていること を考慮すると、今回の我々の知見から図 1 のような仮説 を呈することができる。すなわち、脊髄において SP を遊 離する C 線維である Type1 神経が傷害によって退縮し、 カプサイシン非感受性線維である Type3 神経が突起伸展 を起こすことによって、両者の反応性に変化が生じたの であろう。

更に、神経傷害後に BK 反応がモルヒネ非感受性となったメカニズムとしては、図2のようなモデルが考えられる。正常時、BK は Type1 一次知覚神経終末の B2 受容体に作用し、この反応は同じ線維に存在するµオピオイド受容体にモルヒネが作用することによって完全に抑制された。しかし、神経傷害時にはモルヒネ非感受性の Type3神経に存在するB1 受容体へと作用点をスイッチしたことが示唆された。このようなメカニズムが、神経因性疼痛時のモルヒネ非感受性の一因であると考えられる。



図1 神経因性疼痛モデルにおける疼痛伝達機構の変化



図 2 神経因性疼痛モデルにおける BK 誘発性侵害反応 のモルヒネ非感受性機構

引用文献

- Inoue M, Kobayashi M, Kozaki S, Zimmer A, Ueda H. Nociceptin/orphanin FQ-induced nociceptive responses through substance P release from peripheral nerve endings in mice. Proc Natl Acad Sci USA. 95:10949-10953, 1998
- Malmberg and Basbaum. Partial sciatic nerve injury in the mouse as a model of neuropathic pain: behavioral and neuroanatomical correlates. Pain. 76: 215-222, 1998
- Woolf CJ, Shortland P, Coggeshall RE. Peripheral nerve injury triggers central sprouting of myelinated afferents. Nature. 355: 75-78, 1992

エンドモルフィン誘発性抗侵害作用における D-Pro²-エンドモル フィンの選択的拮抗性について

櫻田 忍¹、内山弘子¹、渡邊廣行¹、溝口広一¹、藤村 努、村山季美枝、櫻田 司² ¹東北薬科大学機能形態学、順天堂大学医学部、²第一薬科大学生化学教室

Endoorphins analogues containing D-Pro² antagonizes endoorphin antinociception in ice

¹Shinobu Sakurada, ¹Hiroko Uchiyaa, ¹Hiroyuki Watanabe, ¹Hirokazu izoguchi, ²Tsutou Fujiura, ²Kiie urayaa, ³Tsukasa Sakurada

¹Departent of Physiology and Anatoy, Tohoku Pharaceutical University, ²Division of Biocheical Analysis, Central Laboratory of edical Sciences, Juntendo University ³Departent of Biocheistry, Daiichi College of Pharaceutical Sciences

Suary: The antagonistic actions of D-Pro²-endoorphins on inhibition of the paw withdrawal response by endoorphins were studied in ice. When D-Pro²-endorphin-1 (0.03-0.1 pol) was injected siultaneously with i.t. endoorphin-1 (0.5 nol) or endoorphin-2 (5 nol), antinociception induced by endoorphin-1 was reduced significantly, whereas endoorphin-2-induced antinociception was not affected by D-Pro²-endoorphin-1. Antinociception induced by i.t. endoorphin-2 (5.0 nol) was resuced significantly by its analogue, D-Pro²-endoorphin-2 (100 pol), but not by D-Pro²-endoorphin-1. These results suggest that endoorphin analogues containing D-Pro² are able to discriinate the antinociceptive actions of μ_1 and μ_2 -opioid receptor agonists at the spinal cord level.

緒言

新規の内因性オピオイドペプチドであるエンド モルフィン-1およびエンドモルフィン-2がウシ 脳およびヒト脳から単離・同定され,両ペプチド は受容体結合実験からμ-受容体に極めて高い親和 性を示すことが報告されている¹⁾。

エンドモルフィン-1およびエンドモルフィン -2を脳室内および脊髄くも膜下腔内に投与する と、熱刺激および機械刺激に対して強力な抗侵害 作用を発揮し^{2,-4)}、さらに、炎症痛や神経因性疼 痛に対しても強力な鎮痛作用を発揮するのである。 これらの作用はいずれもオピオイド受容体アンタ ゴニストであるナロキソンによって拮抗される。

一方、 μ -受容体は μ_1 および μ_2 の2つのサブタ イプに分類されてきた。 $\mu(\mu_1$ および μ_2) 受容体 アンタゴニストの β -フナルトレキサミンおよび μ 受容体選択的アンタゴニストであるナロキソ ネイジンを用いた薬理学的手法によって分類され ている。 本実験では、内因性μ-オピオイドアゴニスト であるエンドモルフィン-1およびエンドモルフ ィン-2がμ-受容体サブタイプのいずれの受容体 を介して抗侵害作用を発揮するか、β-フナルトレ キサミンおよびナロキソネイジンを用いて検討し た。

さらに、エンドモルフィン-1およびエンド モルフィン-2のdiastereoisoersである[D-Pro²] -エンドモルフィン-1および[D-Pro²]-エンドモ ルフィン-2が特異的な拮抗作用を示すことが認 められた。

実験方法

実験には ddY 系雄性マウス(22 25g)を 使用した。抗侵害効果は、Paw-withdrawal 法を 用いて評価した。マウス右後肢足蹠に熱刺激を加 え、逃避反応を示すまでの潜時を仮性疼痛閾値と して評価した。マウスはあらかじめ刺激に対して 2.5-3.5秒で反応するものを選択して用いた。 また、刺激部位への損傷を最小限にするために、 刺激時間は 10 秒とした。得られた測定値よ り、% of axiu possible effect (%PE)を算出し た。

マウス脊髄くも膜下腔内への投与は Hylden と Wilcox の方法を用いて行った。なお、β-フナル トレキサミンおよびナロキソネイジンはエンドモ ルフィンおよび DAGO 投与 24 時間前に s.c.処理し た。

実験結果

μ-受容体選択的アンタゴニストのβ-フナルト レキサミン(40g/kg, s.c.)前処理後、エンドモ ルフィン-1(5 nol,i.t.)、エンドモルフィン-2 (5 nol,i.t.)およびDAGO (20 pol,i.t.) をそれぞれ投与すると、いずれも有意な抗侵害作 用の減弱が認められた(Fig. 1)。

さらに、µ 受容体選択的アンタゴニストである ナロキソネイジン (35 g/kg, s.c.)の前処理によ ってエンドモルフィン-2の抗侵害作用は著しく 減弱したのに対してエンドモルフィン-1および DAGO の抗侵害作用にはなんら影響をおよぼさな かった (Fig. 2)。



Fig.1 Effects of pretreatent with β -funaltrexaine on i.t. endoorphin-1, endoorphin-2 and DAGO -induced antinociception in the ose paw withdrawal test. A single dose of β -funaltrexaine was adinistered s.c. 24 h before peptides. Antinociceptive effects were easured 5 in after i.t. adinistration of the endoorphins or 10 in after i.t. DAGO. Each value represents the ean S.E.. for 10 ice. P 0.01 copared to each agonist alone.



Fig. 2. Effects of naloxonazine on i.t. endoorphin-1-, endoorphin-2- and DAGO-induced antinociception in the ouse paw-withdrawal test. Graded doses of naloxonazine (NLZ) were adinistered s.c. 24 h before i.t. adinistration of endoorphin-1, endoorphin-2 and DAGO. Antinociceptive effects were easured 5 in after i.t. adinistration of endoorphins or 10 in after i.t. DAGO. Each colun represents the ean S.E. for 10 ice. P 0.01 copared to each agonist alone.

エンドモルフィン-1およびエンドモルフィン-2 の diastereoisoers である[D-Pro²] -エンドモル フィン-1(0.005-1.0 pol)および[D-Pro²]-エ ンドモルフィン-2(25-100 pol)をi.t. 投与して も抗侵害作用は全く認められない。ところが、 [D-Pro²] -エンドモルフィンには特異的な拮抗作 用があることが認められた。すなわち、エンドモ ルフィン-1(5 nol)のi.t. 投与によって引き起 こされる抗侵害作用は[D-Pro²] -エンドモルフィ ン-1との同時投与によって抑制されたが、 [D-Pro²]-エンドモルフィン-2との併用によって 何ら影響をおよぼさなかった。一方、エンドモル フィン-2 (5 nol)と[D-Pro²]-エンドモルフィン-2との i.t.同時投与によって、エンドモルフィ ン-2 の抗侵害作用に著しい減弱が認められたが、 [D-Pro²]-エンドモルフィン-1との同時投与では

変化は全く認められなかった (Fig. 3)。

Table1Structureofendoorphin-1,endoorphin-2and their analogues containingD-Prounderlined

Endoorphins	Structure
Endoorphin-1	Tyr-Pro-Trp-Phe-NH ₂
D-Pro ² -endoorphin-1	Tyr-D-Pro-Trp-Phe-NH2
Endoorphin-2	Tyr-Pro-Phe-Phe-NH2
D-Pro ²⁻ endoorphin-2	Tyr-D-Pro-Phe-Phe-NH2



Fig. 3. Effects of D-Pro²-endoorphin-1 and D-Pro²-endoorphin-2 on i.t. endoorphin-1 (a), endoorphin-2 (b) and DAGO (c) in the ouse paw withdrawal test. Endoorphins and DAGO were co adinistered i.t. with D-Pro²-endoorphins. Each colun represents the ean S.E. for 10 ice. P 0.01, P 0.05 copared to each agonist alone. E-1: endoorphin-1; E-2: endoorphin-2

考察

エンドモルフィン-1およびエンドモルフィン -2は in vivo および in vitro の実験結果から非 常に 受容体に特異性の高い化合物であることが 認められている。本実験においても、エンドモル フィン-1およびエンドモルフィン-2はµ受容体 アンタゴニストであるβ-フナルトレキサミンの前 処理によってほぼ完全に拮抗された(Fig. 1)。 さらに、エンドモルフィン-1およびエンドモル フィン-2の抗侵害作用におけるµ1およびµ2受容 体サブタイプの関与について検討するため、まず、 µ1受容体選択的アンタゴニストであるナロキソネ イジンの感受性について実験を行った。その結果、 エンドモルフィン-1の抗侵害作用は DAG0 と同様、 高用量のナロキソネイジンを前処理したときのみ 有意に減弱した。一方、エンドモルフィン-2の 抗侵害作用はエンドモルフィン-1よりも極めて 低用量のナロキソネイジンに感受性を示すことか ら、μ-受容体を介して発現する事が示された (Fig. 2)。

これまで、μ1およびμ2受容体の拮抗薬(-フ ナルトレキサミン)およびμ1受容体拮抗薬(ナロ キソネイジン)が見い出され、μ受容体アゴニスト の分類が行われてきたが、特異的なμ2受容体拮 抗薬は見いだされなかった。しかし、本実験にお いて、D-Pro²-endoorphin-1 はμ2のアゴニストで あるエンドモルフィン-1および DAGO の抗侵害作 用のみに拮抗することが認められ、特異的なμ2 受容体拮抗薬として作用する可能性が示唆され

文献

- Zadina JE. Hackler L. Kastin AJ. A potent and selective endogenous agonist for the μ-opiate receptor. Nature 386, 499-502, 1997
- Sakurada S. Zadina JE. Kastin AB. Katsuyaa S. Fujiura K. urayaa K. Yuki . Ueda H. Sakurada T. Differntial involveent of μ-opioid receptor subtypes in endoorphin-1- and -2-induced antinociception. European J. Pharacology 372, 25-30, 1999
- Sakurada S. Hayashi T. Yuhki . Fujiura T. urayaa K. Yonezawa A. Sakurada C. Takeshita . Zadina JE.

Kastin AJ. Sakurada T. Differntial antagonis of endoorphin-1 and endoorphin-2 spinal antinociception by naloxonazine and 3-ethoxynaltrexone. Brain Research 881, 1-8, 2000

4) Sakurada, S. Hayashi T. Yuhki . Fujiura T. Kiie . Yonezawa A. Sakurada C. Takeshita . Sato T. Zadina JE. Kastin AJ sakurada T. Differntial antagonis of endoorphin-1 and endoorphin-2 supraspinal antinociception by naloxonazine and 3-ethyl natrexone. Peptides 23, 895-901.

た。

モルフィンの副作用発現におけるモルフィノンの寄与

石田 隆,大石哲也,塚原邦浩,山野 茂,竹之下玲子,喜多秀樹,土岐 智 福岡大学薬学部衛生科学教室

Possible involvement of morphinone in appearance of side effects of morphine

Takashi Ishida, Tetuya Ooishi, Kunihiro Tukahara, Shigeru Yamano, Reiko Takenoshita, Hideki Kita, Satoshi Toki Faculty of Pharmaceutical Sciences, Fukuoka University

Summary: In mice pretreated with morphinone, a toxic metabolite of morphine, by a single i.t. injection, the analgesic activity of morphine was investigated. The effects of morphinone on naloxone-precipitated withdrawal sign (jumping), rectal temperature and gastrointestinal motility by a single s.c. or i.p. injection were also examined. These effects were compared with control (saline-treated) and morphine-treated mice. Pretreatment with morphinone decreased the analgesic activity elicited by morphine depending on a dose. This decrease was observed at 15 min after morphinone challenging, and continued until one week. In the morphine-treated mice, the antagonistic action of morphine analgesia occurred at 6 hr after treatment, and continued until one week though potency of morphine is apparently low compared to morphinone. Both morphinone and morphine increased the number of jumping, lowered the rectal temperature and diminished the gastrointestinal motility in comparison with control mice. The naloxone-precipitated withdrawal sign (jumping) was seen more frequently in morphinone-treated mice than in morphine-treated mice. The maximum hypothermic response was observed at 1 hr in both morphine- and morphinone-treated mice, and morphinone produced more potent response when compared at the same dose. In depression of gastrointestinal motility, however, morphine was more potent than morphinone. These findings suggest that morphinone formed from morphine may affect morphine analgesia and participate, at least in part, in the appearance of toxic action of morphine.

緒言

最近、モルフィンの鎮痛効果にはモルフィ ン自身とその代謝産物であるモルフィン-6-グルクロニド双方の関与が明らかになった ¹⁾⁻³⁾。モルフィンは有用な鎮痛薬であるが、耐 性発現、呼吸抑制など多くの副作用が出現す ることも知られている⁴⁾。これらの作用がモ ルフィン自身によるものか、それともその代 謝産物によるものかは明らかでない場合が 多い。当教室では、モルフィン-6-デヒドロゲ ナーゼを見い出し、この酵素によりモルフィ ンからモルフィノンが生成されることを示 した⁵⁾⁻⁷⁾。さらにモルフィノンは、モルフィ ンの脳内1回投与により誘発される耐性の 主役であることも明らかにしてきた^{8),9)}。今 回はモルフィンの投与後に見られる副作用 のうち、耐性発現、腸管蠕動運動の抑制、体 温低下作用およびナロキソン誘発禁断症状 について、モルフィンとモルフィノンを用い て比較検討した。

実験方法

耐性発現、腸管蠕動運動への影響および体 温低下作用については、ddY系雄性マウスを 使用し、ナロキソン誘発禁断症状については、 ICR系雄性マウスを使用した。

<u>単回投与による耐性発現の比較</u>

- (1) 生理食塩水に溶かした塩酸モルフィンを
 0.15, 0.25, 0.50, 1.0µg/body脳内投与し、
 15分後にそれぞれ3µg/bodyの塩酸モル
 フィンを再び脳内に投与して、10分~120
 分に亘って鎮痛活性をピンチコック法で
 測定した。
- (2) 4µg/bodyのモルフィノンを前処理後15 分,30分,45分,60分,90分,6時間, 24時間,72時間,168時間後にモルフィン を投与し、それぞれ鎮痛活性を(1)と同様 に測定した。また、モルフィンについても 前処理後15分,60分,6時間,24時間,72 時間,168時間後にモルフィンを投与し、 鎮痛活性を(1)と同様に測定した。

<u>腸管蠕動運動への影響</u>

モルフィンを1.25, 2.5, 5.0, 10mg/kg, モ ルフィノンを5.0, 10, 20mg/kgを各グループ 毎に皮下投与し、30分後デンプンに懸濁した 活性炭200µ l/bodyを経口により与えた。その 20分後に開腹し腸管中の移動度を計測した。 移動度は生理食塩水を皮下投与した場合を 100として計算した。

<u>体温低下作用</u>

モルフィン30mg/kgあるいはモルフィノン 15または30mg/kgを各グループ毎に皮下投与 し、測定開始1時間前,投与直後,1,2,4, 8,16時間後の直腸温度を測定した。 <u>単回投与によるナロキソン誘発禁断症状</u> モルフィノン10mg/kg、モルフィン10mg/kg、

生理食塩水をそれぞれ腹腔内投与し、2時間 後にナロキソン10mg/kgを同様に投与した。 その後60分間のジャンピング回数を観察した。

結果

単回投与による耐性発現

Fig.1 に示すようにモルフィノンは、経時 的および用量依存的にモルフィンの鎮痛活性 を低下させた。また、Fig.2 に示すように、 モルフィンの脳内単回投与によって起こる抗 鎮痛活性が、投与後4~6時間から出現し、1週 間にわたり持続した。

一方、モルフィノンでは投与後15分より明ら かな抗鎮痛活性が現れ、1時間後には最高に達 した。しかもこの効果は1週間にわたり持続し、 モルフィンより強く発現していることからモ ルフィンの耐性発現にモルフィノンが大きく 関わっていることを示唆するものである。



Fig. 1. Effectss of morphinone pretreatment on morphine analgesia. \Box , saline + morphine; \square , morphinone (0.15 μ g/body) + morphine; \square , morphinone (0.25 μ g/body) + morphine; \square , morphinone (0.5 μ g/body) + morphine; \square , morphinone (1.0 μ g/body) + morphine



Fig. 2. Effect of pretreatment with morphine and morphinone on morphine analgesia. \bigcirc , saline + morphine; \blacksquare , morphine + morphine; \bigcirc , morphinone + morphine

腸管蠕動運動への影響

腸管蠕動運動の抑制は、最も低用量で現れ るモルフィンの副作用であり、モルフィノン が影響するかどうか興味のあるところである。 しかし、Fig.3 に示すようにモルフィノンの 作用はモルフィンより弱かった。



Fig. 3. Effects of morphine and morphinone on enterokinesis in mice. ○, morphinone; ●, morphine

<u>体温低下作用</u>

Fig.4 に示すようにモルフィノンの方が強 い体温低下作用を示した。モルフィノンはモ ルフィンの約半量で同程度の体温低下作用を 示した。また、8時間で回復していることか ら高用量での体温低下作用はそれほど持続的 なものではないと考えられる。



Fig. 4. Effects of morphine and morphinone on temperature of mice. \bigcirc , saline; \square , morphine (30 mg); \triangle , morphinone (15 mg); \bigcirc , morphi-none (30 mg)

単回投与によるナロキソン誘発禁断症状

ddy系のマウスを用いた実験では、ジャンピ ングあるいはストレッチングだけのもの、ま たはジャンピングとストレッチングの両方を 行うマウスが観察され、評価が困難であった。 そこでIRC系マウスを使用し、指標をジャンピ ングに絞って観察することにした。同様に処 置したグループ内で、良くジャンプするマウ スは60がかなり困難であった。従って同様の 実験を4回行った結果をFig.5に示している。 また生理食塩水とナロキソンの場合では、ジ ャンプするマウスも少しはいるが明らかにモ ルフィンやモルフィノンよりは少なかった。



Fig. 5. Effects of pretreatment with morphine and morphinone on the naloxone-precipitated with- drawal signs in mice.

今回我々はモルフィンとその毒性代謝物モ ルフィノンを用いてモルフィンの幾つかの副 作用について*In vivo*での検討を試み、興味あ る結果を得た。すなわち、モルフィンの単回 投与による耐性発現には、モルフィノンが、 直接µ-レセプターを介し、あるいは他の耐性 発現機構に関与している可能性が示唆され、 その作用はモルフィノンの用量に依存してい ることが明らかになった。

また、モルフィンの最も低用量で出現する 便秘についてはED₅ので比較してモルフィンの 方が6分の1の低濃度で蠕動運動を低下させ、 モルフィノンの方が弱かった。なお、その用 量作用曲線が平行でないことから作用機構に は違いがあるものと考えられる。今回の場合 は皮下投与であるため、経口投与による検討 が必要かもしれない。コデイノンやエチルモ ルフィノンでは全く逆の結果、すなわち、コ デインやエチルモルフィンよりも強く腸管蠕 動運動を抑制することが明らかにされている。

モルフィンの体温低下作用は種々の要因に より影響がでるので、今回はあえて高用量で 実験を行った。モルフィノンはモルフィンの 約半量で同程度の体温低下作用を示し、しか も用量依存的であった。また、8時間で回復し ていることから高用量での体温低下作用はそ れほど持続的ではないと考えられる。今回の 実験では1時間で最高の体温低下をもたらし ている事から投与から2時間までをさらに詳 しく調べる必要がある。

ナロキソン誘発禁断症状については、単回 投与によっても起こると予想されたので、単 回投与による実験を試みた。マウスによる個 体差が大きく、明解な結論は出なかったが、 相対的にはモルフィノンの方がモルフィンよ り良くジャンプすることが示された。今回の ような単回投与では明確な差が観察できなか ったので、連続投与による検討が必要であろ う。 以上のように、今回の検討からモルフィン の副作用を考える上で、モルフィノンの寄与 の重要性が示された。

文献

- 1) Wolff T, Samuelssun H and Hedner T, Pain, 62, 147 (1995).
- 2) Wolff T, Samuelssun H and Hedner T, ibid., 68, 209 (1996).
- Stuart-Harris R, Joel SP, McDonald P, Currew D and Slevin ML, Br. J. Clin. Pharmacol., 49, 207 (2000).
- 4) "Goodman & Gilman The Pharmacologic Basis of Therpeutics" Ninth edition Ed. by Hardman JG and Limbird LE p521 (1996)
- 5) Yamano S, Kageura E, Ishida T and Toki S, J. Biol. Chem., 260, 5259 (1985)
- 6) Kumagai Y, Todaka T and Toki S, J. Pharmacol. Exp. Ther., 225, 504 (1990)
- 7) Toki S and Yamano S, YAKUGAKUZASSHI, 119, 249 (1999)
- Nagamatsu K, Kido Y, Terao T, Ishida T and Toki S, Life Sci., 30, 1451 (1982)
- 9) Ishida T, Kuwahara K and Toki S, J. Pharmacobid. Dyn., 7, S-71 (1984)

モルヒネとモルヒネ-6-グルクロナイドの脳室内投与後の 脳内分布の相違

黄倉 崇, 込山則行, 齋藤正典, 藤井亜紀, 中西美智, 山田静雄, 木村良平 静岡県立大学薬学部薬剤学

Differential brain distribution of morphine and morphine-6-glucuronide after the intracerebroventricular injection in rats

Takashi Okura, Noriyuki Komiyama, Masanori Saito, Aki Fujii, Misato Nakanishi, Shizuo Yamada, Ryohei Kimura Department of Biopharmacy, School of Pharmaceutical Sciences, University of Shizuoka

Summary: We investigated the brain distribution of morphine and morphine-6-glucuronide (M6G) after intracerebroventricular (i.c.v.) injection of each drug in rats. The CSF concentration of M6G was 5 - 37 times greater than that of morphine at 10, 60 and 120 min after the i.c.v. injection. The apparent elimination clearance from CSF of M6G was 16 times smaller than that of morphine. The CSF concentration of M6G in the intrathecal space measured by microdialysis method was 29 - 79 times greater than that of morphine. M6G was detected in the cerebrum, brainstem, cerebellum and spinal cord at 2 - 21 times higher concentration than morphine after the i.c.v. injection of each drug. Distribution volume in rat brain slice of M6G (0.36 mL/g) was three times less than that of morphine (1.1 mL/g) and close to the extracellular fluid space (0.24 mL/g). These results suggest that relatively high concentration of M6G remains in the central nervous system after the i.c.v. injection may be higher than that of morphine in the brain. The concentration of M6G after the i.c.v. injection may be higher than that of morphine in the brain and spinal fluid that corresponds to vicinity of opioid receptors, and therefore M6G may produce potent analgesic effect.

緒言

モルヒネの活性代謝物であるモルヒネ-6-グル クロナイド(M6G)は、ラットに脳室内投与した場 合、モルヒネ投与と比べ、100倍以上強い鎮痛作 用を示す¹⁾。この理由として、モルヒネとM6Gの作 用するμオピオイド受容体が異なることが示唆さ れているが、両薬物の鎮痛活性の違いを説明す るには至っていない²⁾。ところでM6Gの脂溶性は モルヒネより約200倍低い³⁾ため、両薬物の脳内 分布特性は異なることが予想される。しかし、両 薬物を脳室内投与した後の脳内動態について は明らかでない。そこで本研究では、実験動物と して、モルヒネをM6Gに代謝しないラットを用い, 脳室内投与した後のモルヒネとM6Gの脳内動態 を比較するため、脳室内に投与した両薬物の脳 脊髄液(CSF)からの消失,脊髄腔内への拡散, 脳脊髄組織への分布について検討した。さらに 脳スライス取り込み法により脳分布容積を求め た。

実験方法

実験動物

SD 系雄性ラット(約300g) 脳室内投与後の CSF および脳脊髄組織内薬物

濃度の測定

ラット側脳室に移植した脳室内投与用カニュ ーレより、モルヒネまたは M6G(50 nmol)を、[³H] スクロース(5 kBq)とともに脳室内投与した。その 後、10、60、120分に cisternal puncture 法により CSF(約150µL)を採取し、直ちに下行大動脈より 採血後、脳および脊髄を摘出した。なお、 cisternal puncture 法により採取した約150µL の CSF は、脳室全体の CSF に相当すると考えられ る⁴⁾。CSF、血漿および脳脊髄組織(大脳半球、 脳幹、小脳および脊髄)ホモジネートの上清は、 薬物濃度の定量まで-20℃で保存した。CSF 中 薬物濃度(C_{CSF})から、次式に従い消失速度定数 (Ke)、分布容積(Vd)ならびに消失クリアランス (CL)を算出した。

$C_{CSF} = Dose/Vd$	•	e ^{-ke} ·t	(1)
---------------------	---	---------------------	-----

$$CL = Ke \cdot Vd$$
 (2)

<u>微小透析法による脊髄腔内 CSF 中薬物濃度の</u> 測定

ラット脊髄腔内(Th11-L2)に透析プローブを 移植し,上記と同様にモルヒネまたは M6G(50 nmol)を[³H]スクロース(5 kBq)とともに脳室内投 与後,透析液を回収し,薬物濃度を測定した。薬 物投与前にレトロダイアリシス法により測定したプ ローブ回収率(R)を用いて,次式に従い透析液 中薬物濃度(C_{dialysate})から,脊髄腔内 CSF 中薬 物濃度(C_{ii})を算出した。

 $C_{it} = C_{dialysate} / R$ (3) 脳スライス取り込み実験

ラット脳スライスをモルヒネ(100 μM)または M6G(100 μM)を含むメディウム中で5~120分間



incubation 後, モルヒネまたは M6G のスライス内 取り込み量を測定した。同時に細胞外容積マー カーの[³H]スクロース(9.25 kBq/mL)の脳スライス 取り込み量を測定した。スライス取り込み量とメデ ィウム中薬物濃度の比(S/M)より, 次式に従い脳 分布容積(Vdbrain)を算出した。

 $S/M = Vd_{brain} \cdot (1 - e^{-K \cdot t})$ (4) モルヒネおよび M6G の定量

モルヒネおよび M6G の定量は、Venn ら⁵⁾およ び Stain-Texier ら⁶⁾の方法に従い、HPLC 法により 行った。CSF, 血漿, 脳脊髄組織ホモジネート上 清は, 固相抽出(Waters, Oasis[®] MCX)後, HPLC 試料とした。微小透析法により得た透析液 は, そのまま HPLC 試料として用いた。

結果

<u>脳室内投与したモルヒネおよび M6G の CSF から</u>の消失

モルヒネまたは M6G を[³H]スクロースとともにラットに脳室内投与後, CSF を採取し, 薬物濃度を 測定した。Fig. 1に示したように, 投与後10, 60お よび120分における CSF 中 M6G 濃度は, モルヒ ネ濃度の5~37倍高く, M6G の CSF 中濃度時間 曲線下面積(AUC_{CSF 0-∞})は15.0%dose・min/µL であり, モルヒネの AUC_{CSF 0-∞}の1.5%dose・ min/µL より10倍高値を示した。また CSF 中 M6G 濃度は, いずれの時間においても[³H]スクロース 濃度と同程度であった。各薬物の消失速度定数 (Ke)は, それぞれ0.035 min⁻¹(モルヒネ), 0.015 min⁻¹(M6G), 0.012 min⁻¹([³H]スクロース), 分布

Fig. 1. CSF concentration profiles of morphine (\bigcirc), M6G (\bigcirc) and [³H]sucrose (\triangle) after the i.c.v. injection in rats. Morphine or M6G (both 50 nmol) was injected with [³H]sucrose (5 kBq) into the rat ventricle. Rats were sacrificed at 10, 60 and 120 min. Each point represents the mean ± S.E. of three (morphine, M6G) or six ([³H]sucrose) rats.

容積 (Vd) は1.9 mL (モルヒネ), 0.44 mL (M6G), 0.31 mL([³H]スクロース) であり, M6G の消失クリアランス(CL) は6.7 mL/min で, モル ヒネの CL(67 mL/min)の1/10であり, [³H]スクロ ースの CL(3.7 mL/min)とは有意な差はなかっ た。

脳室内投与したモルヒネおよび M6G の脊髄腔 内への拡散

脊髄腔内に透析プローブを移植したラットに モルヒネまたは M6G を[³H]スクロースとともに脳 室内投与し, 微小透析法により脊髄腔内 CSF 中 薬物濃度を測定した(Fig. 2)。各薬物の脊髄腔 内 CSF 中濃度は, 投与後15~45分で最高値に 達し, 以後経時的に減少した。脊髄腔内 CSF 中 M6G 濃度は, モルヒネ濃度より29~79倍高く, [³H]スクロース濃度と同程度であった。

これより求めた M6G の脊髄腔内 CSF 中濃度 の AUC_{it 0.∞}は13.1 %dose·min/µLで, モルヒネの AUC_{it 0.∞}(0.36 %dose·min/µL)より36倍有意に 高値を示した。また, 脊髄腔内 CSF 中モルヒネ濃 度は, CSFを採取して測定した CSF 中濃度(Fig. 1)と比較し, 投与直後著しく低く, 投与後120分 で同程度の濃度を示した。一方, 脊髄腔内 CSF 中 M6G 濃度は, CSF を採取して測定した CSF 中濃度といずれの時間においても同程度であっ



Fig. 2. CSF concentration in the intrathecal space of morphine (\bigcirc) , M6G (\bigcirc) and $[^{3}H]$ sucrose (\triangle) after the i.c.v. injection in rats. Morphine or M6G (both 50 nmol) was injected with $[^{3}H]$ sucrose (5 kBq) into the rat ventricle. CSF concentration in intrathecal space was measured by a microdialysis probe implanted into intrathecal space (Th11-L2). Each point represents the mean \pm S.E. of three (morphine, M6G) or six ($[^{3}H]$ sucrose) rats.

た。

<u>脳室内投与したモルヒネおよび M6G の脳脊髄</u> 組織への分布

モルヒネまたは M6G(50 nmol)を脳室内投与 し, 10, 60および120分後の大脳, 脳幹, 小脳お よび脊髄内薬物濃度を測定した(Fig. 3)。各組 織内 M6G 濃度は, 投与10分後でモルヒネ濃度 の1.9~11.4倍, 60分後で5.8~9.5倍, 120分後で



Fig. 3. Concentration of morphine and M6G in the cerebrum, brainstem, cerebellum and spinal cord after the i.c.v. injection in rats. Morphine or M6G (both 50 nmol) was injected into the rat ventricle. Rats were sacrificed at 10, 60 and 120 min. Each column represents the mean \pm S.E. of three rats. 6.9~20.7倍高かった。また、血漿中にはモルヒネ 投与10分後に0.02 %dose/mLのモルヒネが検出 され、60、120分後には検出されなかった。一方、 M6Gを投与後、血漿中 M6G は、いずれの時間 においても検出されなかった。

<u>モルヒネおよび M6G の脳スライス取り込み</u>

モルヒネ, M6G および[³H]スクロースのラット脳 スライス取り込み量を測定したところ,各薬物の 脳スライス取り込み量は経時的に増加し,いずれ の薬物でも120分では定常状態に達した(Fig. 4)。 これより算出した M6G の脳分布容積は0.36 mL/g であり,モルヒネの分布容積(1.1 mL/g)の 1/3であった。また, [³H]スクロースの分布容積 (0.24 mL/g)とは有意な差はなかった。



Fig. 4. Time course of rat brain to medium concentration ratio of morphine (\bigcirc) , M6G (\bigcirc) and [³H]sucrose (\triangle) . Slices were incubated at 37 °C in the medium containing morphine or M6G (both 100 μ M) with [³H]sucrose (9.25 kBq/mL). Each point represents mean \pm S.E. of three (morphine, M6G) or six ([³H]sucrose) experiments. Solid lines were generated from Eq.4.

考察

モルヒネとM6Gをラットに脳室内投与後,CSF 中薬物濃度および脳脊髄組織内濃度を測定し, 両薬物の脳内分布について検討した。ラットにモ ルヒネまたはM6Gを脳室内投与し,CSFを採取し て薬物濃度を測定したところ, CSF中M6G濃度 は、いずれの時間においてもモルヒネ濃度より高 値を示した。これはM6GのCSFからの消失クリア ランスがモルヒネより10倍低く, [³H]スクロースと 同程度であるためと考えられる。[³H]スクロースは 脳内で代謝されず,血液脳関門(BBB)または血 液脳脊髄液関門(BCSFB)を透過しないため, そ の消失はCSF bulk flow(脳室から脊髄の周りを 循環し、クモ膜下腔からクモ膜顆粒へと流れ、上 矢状静脈洞から血液中へと流れるCSFの流れ) によると考えられる。今回測定した[3H]スクロース の消失クリアランスはCSF bulk flow rate (2.9 µL/min)⁷⁾に近似し, M6Gの消失クリアランスと有 意な差はなかった。これより、M6GのCSFからの 消失のうちCSF bulk flowの占める割合は高く, M6Gの脳内での代謝や、BCSFBまたはBBBから の消失は少ないと考えられる。一方, モルヒネの CSFからの消失クリアランスはM6Gの10倍, [³H] スクロースの18倍高く、またモルヒネを脳室内投 与後,血漿中にモルヒネが検出されたことから, モルヒネはBBBまたはBCSFBを介して脳側から 血液側へ排出されることが示された。

次に両薬物のCSF中での拡散を調べるために、 脊髄腔内に挿入した透析プローブを用いて、脊 髄腔内CSF中薬物濃度を測定した。脊髄腔内 CSF中M6G濃度は、CSFを採取して測定した脳 室内CSF中M6G濃度と同程度であったが、投与 直後のモルヒネ濃度では著しい濃度差がみられ た。これよりモルヒネの脳室内から脊髄腔内への 分布は遅いのに対し、M6Gは脳室内投与後、脊 髄腔内まで速やかに分布することが示された。脳 室内投与後、M6Gはモルヒネと異なり、脊髄腔内 CSFにおいても高濃度存在したことから、脳室内 投与により、M6Gは脳内だけでなく、脊髄レベル でも鎮痛作用を発現する可能性が示された。

続いてモルヒネとM6GのCSFから脳脊髄組織 への分布を調べるため、脳室内投与後、大脳、 脳幹、小脳および脊髄における薬物濃度を測定 した。脳各部位および脊髄内M6G濃度は、モル ヒネの場合と比べて1.9~20.7倍高かった。CSFと 脳細胞間液は,1層の上衣細胞によって隔てら れており, 上衣細胞は細隙結合というゆるい接合 部を持っているために、物質の透過性はよいと考 えられる。モルヒネに比べ高い脳脊髄組織内 M6G濃度を示すのは、高いCSF中M6G濃度に 起因すると考えられる。ラット脳スライスへの取り 込み量から算出したM6Gの脳内分布容積は、モ ルヒネの分布容積の1/3であり、細胞外容積の指 標となる[³H]スクロースの分布容積と同程度であ った。これより、モルヒネが脳実質細胞に分布す るのに対し、M6Gの細胞への分布は極めて少な いことが示された。脳室内投与したM6Gが脳脊 髄組織内に高濃度残存し、さらにM6Gが細胞外 液に局在するため,細胞膜表面上に存在するオ ピオイド受容体近傍でのM6G濃度は高いと考え られる。

以上の結果から, 脳室内投与した M6G は, モ ルヒネと比較し, CSF からの消失クリアランスが小 さく, 脊髄腔内にも高濃度分布すること, 脳脊髄 組織内に高濃度残存し, さらに M6G は脳内で細 胞外液中に局在することが示唆された。この M6G の脳内分布特性から, M6G は脳室内投与 後, 作用部位の濃度を反映する脳細胞間液中 に高濃度存在することが示唆され, このことが M6G の強い鎮痛作用発現に関与することが示 唆された。

引用文献

 F. V. Abbott and R. M. Palmour: morphine-6-glucuronide: Analgesic effects and receptor binding profile in rats. *Life Sci.*, 43, 1685-1695 (1988)

- P. B. Osborne, B. Chieng and M. J. Christie: Morphine-6β-glucuronide has a higher efficacy than morphine as a mu-opioid receptor agonist in the rat locus coeruleus. *Br. J. Pharmacol.*, 131, 1422-1428 (2000)
- 3) D. Wu, Y.-S. Kang, U. Bickel and W. M. Pardridge: Blood-brain barrier permeability to morphine-6-glucuronide is markedly reduced compared with morphine. *Drug Metab. Dispos.*, 25, 768-771 (1997)
- R. F. Venn and A. Michalkiewicz: Fast reliable assay for morphine and its metabolites using high-performance liquid chromatography and native fluorescence detection. *J. Chromatogr.*, 525, 379-388 (1990)
- F. Stain-Texier, G. Boschi, P. Sandouk and J.-M. Scherrmann: Elevated concentration of morphine 6-beta-D-glucuronide in brain extracellular fluid despite low blood-brain barrier permeability. *Br. J. Pharmacol.*,128, 917-924 (1999)
- 6) T. Seki, N. Sato, T. Hasegawa, T. Kawaguchi and K. Juni: Nasal absorption of zidovudine and its transport to cerebrospinal fluid in rats. *Biol. Pharm. Bull.*, 17, 1135-1137 (1994)
- 7) K. Takasawa, T. Terasaki, H Suzuki, T. Ooie and Y. Sugiyama: Distributed model analysis of 3⁻-azido-3⁻-deoxythymidine and 2⁻,3⁻-dideoxyinosine distribution in brain tissue and cerebrospinal fluid. *J. Pharmacol. Exp. Ther.*, 282, 1509-1517 (1997)

ラビット手術麻酔モデルの開発

- 超短時間作用性µ-agonist: remifentanil による検討 -

林田眞和¹, 福永敦翁², 目野亜希¹, 関山裕詩¹, 有田英子¹, 花岡一雄¹ 1 東京大学医学部附属病院麻酔科・いたみセンター 2 Harbor/UCLA Medical Center 麻酔科

A rabbit model for the study of surgical anesthesia -Validation with ultra-short acting μ-agonist : remifentanil-Masakazu Hayashida ¹, Atsuo Fukunaga ², Aki Meno ¹, Hiroshi Sekiyama ¹, Hideko Arita ¹, Kazuo Hanaoka ¹

¹ Department of Anesthesiology, The University of Tokyo Hospital ² Department of Anesthesiology, Harbor/UCLA Medical Center

Summary: We have developed an animal model, which allows for quantification of the depth of surgical anesthesia/analgesia using both mechanical clamping and electrical stimulation as simulated surgical incision. After tracheostomy and intravascular cannulation under isoflurane anesthesia, eight rabbits were placed on a sling that allowed animals to move the head and extremities freely. In spontaneously breathing animals, inspired isoflurane concentration was reduced stepwise from 3% to 1.5% and then to 0%. Remifentanil was infused at four stepwise increasing infusion rates (0.1, 0.2, 0.4 and 0.8 μ g/kg/min). At each dose of isoflurane and remifentanil, cardiovascular, respiratory, and anesthetic/analgesic variables including the number of animals unresponsive to clamping the forepaw (non-respondent) and threshold intensities of subcutaneous electrical stimulation at 2Hz, 5Hz and 50Hz required for the head lift (HLT: pain detection threshold) and escape movement responses (EMT: pain tolerance threshold) were assessed. HLTs and EMTs, especially those at 5Hz, changed in parallel with changing the number of non-respondent, which represented the level of surgical anesthesia/analgesia. Therefore, HLT and EMT at 5Hz could be used reliably as quantitative measures of the level of surgical anesthesia/analgesia. This novel animal model with multimodal tests and monitoring that closely mimics clinical anesthesia seemed suitable for research of surgical anesthesia/analgesia.

緒言

従来、手術を施行できるほど深い麻酔の効 果あるいは鎮痛の効果、すなわち手術麻酔/ 鎮痛の効果は、ヒトでも動物でも、実際の皮 膚切開あるいは尾や四肢のクランプなど、手 術に匹敵する侵害刺激に対する合目的的な 回避反応の有無によって判定されてきた¹⁾。 しかし、このような粗雑なテストでは、特に 単一の対象において、手術のための麻酔や鎮 痛の効果を定量的に評価するのは困難であ る²⁾³⁾⁴⁾。われわれは、擬似手術刺激として前 肢のクランプと皮下電気刺激を併用した、手 術麻酔/鎮痛の効果判定のためのウサギモデ ルを開発した。このモデルにおいては、手術 麻酔/鎮痛の深さないし効果を繰り返し定量 できる上に、侵害刺激や麻酔薬あるいは鎮痛 薬投与に対する呼吸循環の反応を持続的に モニターすることが可能である⁵⁾。

以前の研究で代表的な吸入麻酔薬のイソフ ルレンと同じく代表的な中時間作用性オピ オイド(μ-アゴニスト)を使用して 5Hz の皮下 電気刺激による逃避運動誘発閾値によって 外科麻酔/鎮痛の深度がよく定量されること を発表した。今回は、イソフルレンと超短時 間作用性μ-アゴニストであるレミフェンタ ニルを使用して、このモデルのさらなる動作 性能評価を行った。

実験方法

実験系の準備

体重 2.7-3kg のオスの New Zealand 白ウサ ギ 8 匹を対象として研究を行った。マスクに よる 5%イソフルレン(I)吸入で麻酔を導 入し、3% I 麻酔下で気管切開・挿管し、呼 吸は自発呼吸のままとした。耳の動静脈にカ ニューレを挿入し輸液と動脈圧持続モニタ ーを開始した。膀胱にバルンカテーテルを挿 入し、白熱ランプを使用して直腸温を 38-39° C に保った。

動物を頭と四肢を自由に動かせるゴムシー ト製のハンモックに吊るし、前肢の掌側皮下 5mmの深さに一対の針電極を刺入し、Grass S48 電気刺激器 (Grass Medical Instruments, Quincy, MA,USA) に接続した。

2. 侵害刺激とそれに対する行動反応

伝統的な手術麻酔深度の評価法として前肢 クランプ試験を行った。前肢遠位部 1/4 をゴ ムカバー付きの止血鉗子で最長 10 秒間まで 律動的にかつ横断的に把持した。動物が「逃 走」「跳躍」様の動作など合目的的回避行動 を示した場合を陽性反応と見なした¹)。手術 麻酔/鎮痛の効果の指標として、各測定時点に おいて、前肢クランプに対する無反応率 (%non-respondent; 8 匹中何%が陽性反応を 示さなかったか)を算出した²⁾³⁾⁴⁾。

対側前肢での皮下電気刺激は、周波数 2Hz, 5Hz,50Hz、持続 1msec の矩形波をこの順 に適用し、各周波数における刺激の強さ(電 圧)を0から最高 150volt まで緩徐に増加さ せ、頭部挙上反応(head lift=HL)と逃避行動 反応(escape movement=EM) を誘発する電 気刺激の強さの閾値を記録した(HLT と EMT)。

3. 呼吸循環の反応

収 縮 期 ・ 拡 張 期 ・ 平 均 動 脈 圧 (SAP,DAP,MAP)、心拍数(HR)を連続的に、 また呼吸数(RR)、および血液ガスを繰り返し 測定した。

4. テスト薬

Iの濃度を 3%から 1.5%、さらに 0%へと 30 分毎に減少させた(予備研究でのウサギに おける I の最小肺胞濃度 MAC¹⁾は 1.5%で あった)。

完全覚醒後にレミフェンタニル(R) を1つの 持続投与速度 2 時間ずつ4つの投与速度 0.1, 0.2, 0.4 and 0.8 μg/kg/min で計 8 時間にわた って持続静脈内投与した。R 最終投与の 60 分 後にナロキソン(N) 0.1mg/kg を静脈内投与 してFの効果をリバースした。

3%, 1.5%, 0%の I 吸入の最後に、次いで R の各投与速度での持続静注開始 5, 15, 30, 60, 120 分後に、そして N 投与の 15 分後 に%non-respondent, HLT と EMT, SAP, DAP, MAP, HR, RR および血液ガスを測定 した。

5. 統計解析

データは Mean+-SD または Mean+-SEM で 表示した。0% I での、すなわち最初の F 投与 の直前での測定値を baseline として、SAP, DAP, MAP, HR, RR, および 2Hz, 5Hz, 50Hz の 電気刺激における HLT と EMT の変化を、繰 り返し測定の ANOVA と Fischer の PLSD を使 用して検定した。%non-respondent の変化は、 カイ二乗検定で検討した。測定項目間の相関 は直線回帰分析で検討した。P<0.05 を有意と した。

結果

1. 呼吸循環反応

SAP, DAP と MAP は I によって投与量依存 性に減少した。HR は R 投与後階段状に投与 量依存性に減少した。RR も R 投与後階段状 に投与量依存性に減少した。動脈血炭酸ガス 分圧 (PaCO2) は、I 投与により投与量依存性 に増加し、R 投与後は階段状に投与量依存性 に増加した。以上の測定値は R 投与終了 60 分後に baseline に復した。

2. %non-respondent

Iによって%non-respondent は投与量依存性
 に増加した。1.5% I は半数の動物において前
 肢クランプに対する回避行動反応を消失させ
 (つまり本研究においても1.5% I は1MAC に相当)、2MAC に相当する3% I は全例で回避反応を消失させた(Fig.1)。R投与後に%non-respondent は階段状に投与量依存性に
 増加し、N投与後に0% に復した(Fig.1)。

3. 電気刺激閾値の変化

Fig.2 に 5Hz での HLT と EMT の変化を示す。 I 投与中、HLT と EMT はほぼ同様の値を示 した。5 Hz での HLT と EMT は I 投与によ リ投与量依存性に増加した。2Hz および 5Hz での HLT と EMT にもほぼ同様の変化が見ら れた。

R 投与後には各周波数において HLT より EMT の方が高くなった。 R 投与によって5 Hz での HLT と EMT は階段状に用量依存性に 増加した(Fig.2)。2Hz,50Hz での HLT と EMT もほぼ同様に変化したが、R 投与終了 60 分後 に 2Hz,5Hz,50Hz での HLT および 50Hz での EMT は baseline の水準に復し、N 投与後に 5Hz での EMT は baseline の水準に復した。



Fig.1. The change in %non-respondent

%nonrespondent =the percentage of animals that did not show aversive behaviors in response to clamping the forepaw, p<0.05 vs. the baseline value, p<0.05 vs. the last value at a previous dose.



Fig.2. Changes in HLT and EMT at 5Hz

*p<0.05 vs. the baseline value, #p<0.05 vs. the last value at a previous dose.

4. 電気刺激に対する反応(HLT,EMT)とクラ ンプ試験に対する反応(%non-respondent)の間 の関係

各測定時点での、各周波数での HLT と EMT の平均値は、いずれも% non-respondent と有意 に相関した(すなわち各電気刺激閾値 は%non-respondent と平行して変化した)。そ の中で5HzでのEMTが%non-respondentと最 もよく相関した(Fig.3)。テスト薬の麻酔/鎮痛 効果の投与量依存性は5HzでのEMTによっ て最も明白に検出できた。



Fig.3. The relationship between the means of EMT at 5Hz at the time points of the study and %nonrespondent

考察

本モデルにおいては、機械的クランプと電 気刺激を手術刺激に模した侵害刺激として使 用し、行動学的ならびに生理学的反応を同時 にモニターした。今回このモデルによって手 術麻酔/鎮痛の効果を繰り返しかつ定量的に 測定できるか検討した。また、どの周波数の 電気刺激がこの目的に最もよく適するかを検 討した。

報告によれば、吸入麻酔薬を使用した場合 でも静脈麻酔薬ないし鎮痛薬を使用した場合 でも、クランプなど一定の強い侵害刺激に対 して対象が行動反応を示さない確立 (%probability of no response)を統計学的に算 出することによって手術麻酔/鎮痛の効果を 定量することが可能である²⁾³⁾⁴⁾。ただし、こ の手法による麻酔/鎮痛の効果の定量には多 数例での検討を要する。本研究では前肢クラ ンプに対する無反応率を直接算出することに よってイソフルランとレミフェンタニルの手 術麻酔/鎮痛の効果を評価した。クランプの部 位に関しては、予備実験で、尾より前肢の方 が繰り返しクランプによく耐え、頻回刺激後 にも安定した結果が得られたため、また、ブ タにおいては尾クランプより前肢クランプの 方がより強い侵害刺激であると報告されてい るため⁶⁾、本研究では前肢のクランプを採用 した。

手術麻酔のテストにおいて、これまでにも 時に擬似手術刺激として電気刺激が利用され てきた。しかし、これまでは、多数の対象に おいて、一定の強さの電気刺激に対する回避 反応の有無を測定した集積データから、回避 反応を示さない確立を算出して麻酔/鎮痛の 効果を判定してきた 1)2)7)8)。今回は、単一対 象においても麻酔/鎮痛効果を定量できる可 能性を狙って、電気刺激強度を弱から強へと 連続的に変化させて特定の行動反応の誘発さ れる刺激閾値を測定した。R 投与後、刺激強 度を上げるにつれてまず HL が、次いで EM が誘発された。HLT は刺激が痛みとして感じ られるようになり、覚醒反応を促す閾値 (pain detection threshold)、EMT は痛みが絶えがたく 感じる閾値(pain tolerance threshold)と解釈さ れる⁹⁾。

本研究では、HLT と EMT のすべての対が、 多かれ少なかれ、手術麻酔/鎮痛効果を表 す %non-respondent と平行して変化した。し たがってこれらの刺激閾値はいずれも手術麻 酔/鎮痛深度の定量に使用することが可能と 考えられた。その中でも 5Hz での EMT が、%non-respondent とよく一致し、最も信頼 性の高い手術麻酔/鎮痛の効果の指標として 使用できると考えられた。

手 術 麻 酔 / 鎮 痛 の テ ス ト で は 一 般 に 50-100Hz の電気刺激が侵害刺激として使用さ れてきた¹⁾²⁾⁷⁾⁸⁾¹⁰⁾。ヒトで皮膚表面電極による 刺激を加えた場合、この周波数範囲の電気刺 激が最も明白な痛みを生じると報告されてお り¹¹⁾、この意味では 50-100Hz での電気刺激が 手術麻酔/鎮痛のテストには最適かも知れな い。しかし硬膜外フェンタニルによって生じ た分節性の鎮痛効果は、5Hz の電気刺激によ って最も鋭敏に検出されたという報告が見ら れる¹²⁾。本研究においてもテスト薬の麻酔/ 鎮痛効果の投与量依存性は 5Hz での EMT に よって最も明白に検出できた。また、5Hz で の EMT が手術麻酔の効果を表 す%non-respondent に最も密に相関した。し たがって、5Hz での皮下電気刺激は、2Hz や 50Hz でのそれより、手術麻酔/鎮痛の深度を定 量するための擬似手術刺激として最も適する と考えられた。

電気刺激閾値、殊に 5Hz での電気刺激閾値 を機械的クランプに対する反応と組み合わせ た場合、単一対象においても手術麻酔/鎮痛の 効果が繰り返しかつ定量的に測定できた。ま た、すべての電気刺激閾値がナロキソンによ るリバース後に baseline の水準に復しており、 今回の電気刺激法では、頻回刺激後も組織損 傷に由来する感度低下を生じないと思われた。 実際、電気刺激は組織損傷を生じる可能性が 最も低いとされている¹¹⁾、

手術麻酔/鎮痛のための動物としては、動静脈の血管確保が容易であること、行動反応のみならず呼吸循環の種々の指標のモニターが容易にできること、薬物の投与量がヒトでのそれと類似することなどの点で、ウサギはネズミ類に大きくまさると思われる¹³⁾。

結語

われわれは、擬似手術刺激として機械的ク ランプと電気刺激の両者を使用した手術麻酔 /鎮痛研究のためのウサギモデルを開発した。 本モデルでは特に 5Hz の電気刺激によって手 術麻酔/鎮痛の深度を繰り返し正確に定量で きるのみならず、呼吸循環動態のモニターが 容易であり、手術麻酔/鎮痛の研究目的にきわ めて有利と考えられた。

引用文献

- Eger Il EI, Saidman LJ, Brandstater B. Minimum alveolar anesthetic concentration: A standard of anesthetic potency. Anesthesiology 1965; 26: 756-763
- Zbinden AM, Maggiorini M, Petersen-Felix S, Lauber R, Thomson DA, Minder CE: Anesthetic depth defined using multiple noxious stimuli during isoflurane/oxygen anesthesia l. Motor reactions. Anesthesiology 1994; 80: 253-260
- Hung OR, Varvel JR, Shafer SL, Stanski DR: Thiopental Pharmacodynamics II. Quantification of clinical and electroencephalographic depth of anesthesia. Anesthesiology 1992; 77: 237-244
- Ausems ME, Hug, Jr. CC, Stanski DR, Burm AGL: Plasma concentration of alfentanil required to supplement nitrous oxide anesthesia for general surgery. Anesthesiology 1986; 65: 362-373
- 5) 林田真和, 福永敦翁, 目野亜希, 小松郷 子, 有田英子, 花岡一雄, 手術麻酔/鎮痛 効果測定のための動物モデル. JNRC Proceedings 22: 129-133, 2001
- 6) Eger II EI, Johnson BH, Weiskopf RB, Holmes MA, Yasuda N, Targ A, Rampil IJ. Minimal alveolar concentration of I-653 and isoflurane in pigs: Definition of a supramaximal stimulus. Anesth Analg 1988; 67: 1174-1176
- Laster MJ, Liu J, Il EI, Taheri S. Electrical stimulation as a substitute for the tail clamp in the determination of minimum alveolar concentration. Anesth Analg 1993; 76: 1310-1312
- Jones RM, Cashman JN, Eger Il EI, Damask MC, Johnson BH: Kinetics and Potency of desflurane in volunteers. Anesth Analg 1990; 70: 3-7
- Kissin I, Stanski DR, Brown PT, Bradley, Jr. EL: Pentobarbital-morphine anesthetic interactions in terms of intensity of noxious stimulation required

for arousal. Anesthesiology 1993; 78: 744-749

- Paalzow G, Paalzow L. The effect of caffeine and theophylline on nociceptive stimulation in the rats. Acta pharmacol toxicol 1973; 32: 22-32
- Notermans SLH. Measurement of the pain threshold determined by electrical stimulation and its clinical application, Part 1. Methods and factors possibly influencing the pain threshold. Neurology 1966; 16: 1071-1086
- 12) Liu S, Gerancher JC, Bainton BG, Kopacz DJ,

Carpenter RL: The effect of electrical stimulation at different frequencies on perception and pain in human volunteers: Epidural versus intravenous administration of fentanyl. Anesth Analg 1996; 82: 98-102

13) Langerman L, Chaimsky G, Golomb E, Tverskoy M, Kook AI, Benita S. A rabbit model for evaluation of spinal anesthesia: Chronic cannulation of the subarachnoid space. Anesth Analg 1990; 71: 529-535

超短時間作用性µ-agonist : remifentanil の急性耐性

- ラビットモデルにおける検討 -

林田眞和¹, 福永敦翁², 目野亜希¹, 関山裕詩¹, 有田英子¹, 花岡一雄¹ 1 東京大学医学部附属病院麻酔科・いたみセンター 2 Harbor/UCLA Medical Center 麻酔科

Acute tolerance development in ultra-short acting μ-agonist : remifentanil in a rabbit model of surgical anesthesia/analgesia -Masakazu Hayashida ¹, Atsuo Fukunaga ², Aki Meno ¹, Hiroshi Sekiyama ¹, Hideko Arita ¹, Kazuo Hanaoka ¹ ¹ Department of Anesthesiology, The University of Tokyo Hospital ² Department of Anesthesiology, Harbor/UCLA Medical Center

Summary: Although acute tolerance to analgesia develops rapidly during remifentanil infusion, it is unknown whether acute tolerance develops also to its non-analgesic effects. We investigated analgesic, cardiovascular and respiratory effects of constant-rate remifentanil infusion in a rabbit acute pain model. Nine tracheotomized, spontaneously breathing and vascularly cannulated rabbits were placed on a sling that allowed animals to move the head and legs freely. In conscious animals, remifertanil was infused at a rate of $0.3\mu g/kg/min$ for 360 minutes. Cardiovascular, respiratory, and analgesic variables including percentage of animals behaviorally unresponsive to clamping the forepaw (%non-respondent) and threshold intensities of subcutaneous electrical stimulation at 5Hz required to evoke the head lift response (HLT: pain detection threshold) and the escape movement response (EMT: pain tolerance threshold) were monitored. By ANOVA and Fischer's PSLD, %non-respondent, HLT, EMT and PaCO2 increased significantly and reached their maximums while blood pressure, heart rate and respiratory rate decreased and reached their minimums within 120 minutes after the start of remifentanil infusion. Thereafter, these variables began to return toward pre-infusion levels despite continuing infusion. Our results indicate that during remifentanil infusion acute tolerance develops in a few hours not only to its analgesic but also to its cardiovascular as well as respiratory effects.

緒言

モルヒネ ¹⁾⁻⁴⁾、アルフェンタニル ⁵⁾⁶⁾、スフェ ンタニル ⁷⁾やレミフェンタニル ⁸⁾などの μ受 容体アゴニストの定速持続静脈内投与中に

それらの鎮痛効果に対する急性耐性が発現 することが報告されている。鎮痛作用以外の、 例えば呼吸抑制などのオピオイドの作用に 対しても急性耐性が成立するか否かを検討 した報告は少ない。モルヒネの持続静脈内投 与中に、その鎮痛作用に対しては迅速に急性 耐性が成立する一方、心拍数減少などの循環 抑制作用、動脈血炭酸ガス分圧上昇などの呼 吸抑制作用に対しては急性耐性が成立しな いことを示唆する報告が見られる²⁾⁹⁾。レミフ ェンタニルはもっぱら持続静脈投与で使用 される超短時間作用性µ受容体アゴニストで あり¹⁰⁾、その鎮痛効果にも急性耐性が発現す ることが最近報告された⁸⁾。しかし、モルヒ ネと同様、その呼吸循環作用に急性耐性が生 じないのかどうか検討した報告は見られな い。今回、ウサギの手術麻酔/鎮痛のモデルを 使用してレミフェンタニルの鎮痛作用と呼 吸循環作用の急性耐性発現の有無を検討し た。

実験方法

方法の詳細は他の論文で詳述した¹⁰⁾¹¹。体 重約 3kg のオスの New Zealand 白ウサギ9 羽においてイソフルレン麻酔下で気管切 開・挿管し、呼吸は自発呼吸のままとし、耳 の動静脈にカニューレを挿入した。動物を 頭と四肢を自由に動かせるゴムシート製の ハンモックに吊るし、前肢の掌側皮下 5mm の深さに一対の針電極を刺入し、Grass S48 電 気 刺 激 器 (Grass Medical Instruments, Quincy, MA,USA) に接続した。

レミフェンタニルの鎮痛効果は、最長 10 秒間の前肢クランプに対して、何%のウサギ が合目的的回避行動を示しさなかったかと いう、前肢クランプに対する無反応率 (%non-respondent)、および対側前肢での皮 下電気刺激(周波数 5Hz,電圧0から最高 150V までの可変、持続 1msec 矩形波電流) による頭部挙上反応誘発閾値(HLT=疼痛感 知閾値)と逃避行動反応誘発閾値(EMT=疼痛 不耐容閾値)の両者で検討した 10)11)。

レミフェンタニルの呼吸循環効果は、収縮 期・拡張期・平均動脈圧 (SAP,DAP,MAP)、心 拍数(HR)を連続的に、また呼吸数(RR)、およ び血液ガス、特に動脈血炭酸ガス分圧 (PaCO2)を繰り返し測定することによって検 討した。

イソフルレン麻酔からの全覚醒を確認後、 6 時間にわたるレミフェンタニル(R) 0.3 µg/kg/min の持続静脈内投与を開始した。R の投与開始直前 (0分)からRの投与終了(360 分)の 60 分後(420分)まで、最初の 30 分間は 15 分間隔で、以後 30 分間隔で上記測定項目 を繰り返し測定記録した。

データは Mean+-SD または Mean+-SEM で 表示した。0 分での測定値を前値として、SAP, DAP, MAP, HR, RR, および 5Hz の皮下電気刺 激における HLT と EMT の変化を、繰り返し 測定の ANOVA と Fischer の PLSD を使用して 検定した。% non-respondent の変化は、カイ 二乗検定で検討した。P<0.05 を有意とした。

結果

R 投与開始後%non-respondent は迅速に上昇し、90分で最大値をとった後減少に転じ、
 R 投与終了後前値の0%に復した。HLT と
 EMT も R 開始後迅速に上昇し、それぞれ60分と120分で最大値をとった後減少に転じ、
 R 投与終了後前値に復した(図1)。

R 投与開始後 SAP は変化しなかったが、 DAP と MAP は低下し、90 分で最低値をとっ た後、R 持続投与中 210 分には前値に復した。 R 投与開始後 HR は迅速に減少し、60 分後に 最低値をとった後増加に転じ、R 持続投与中 120 分には前値に復した(図 2)。

R 投与開始後 RR は迅速に減少し、120 分 後に最低値をとった後増加に転じ、R 投与終 了後前値に復した(図3)。R 投与開始後 PaCO2 は迅速に増加し、120 分後に最大値を とった後減少に転じ、R 投与終了後前値に復 した。



Fig.1. Changes in HLT and EMT at 5Hz during and after remifentanil infusion

*p<0.05 vs. the baseline value, #p<0.05 vs. the peak value.



Fig.2. The change in the heart rate (HR) during and after remifentanil infusion

*p<0.05 vs. the baseline value, #p<0.05 vs. the bottom value.



Fig.3. The change in the respiratory rate (RR) during and after remifentanil infusion

*p<0.05 vs. the baseline value, #p<0.05 vs. the bottom value.

考察

今回の研究結果から、レミフェンタニルの 持続投与中、その鎮痛効果のみならず、呼吸 循環効果も 60-120 分の間に最大効果に至り、 その後は持続投与中にも拘わらず効果が減 弱することが明らかになった。すなわち鎮痛 効果のみならず呼吸循環効果に対しても急 性耐性が迅速に生じる。

オピオイドの投与中、その循環作用に対し て急性耐性が生じるかどうか検討した報告 はほとんど見られない。しかし、1つの報告 においては、モルヒネ持続投与中、鎮痛作用 に急性耐性が生じたのに反して、モルヒネ持 続投与の開始とともに急減した心拍数がは モルヒネ持続投与の間中減少したまま経過 しており²⁾、モルヒネでは循環作用に対する 急性耐性が生じない可能性が示唆される。

呼吸作用に対して急性耐性が生じるか否 か議論がある。モルヒネ持続投与中、鎮痛作 用に急性耐性が発生したのに反して、呼吸抑 制作用に対する急性耐性は生じなかったと する報告がある一方⁹⁹、フェンタニルの bolus 投与後呼吸抑制作用に対する急性耐性が急 速に生じたとする報告がある¹³⁾。

オピオイドの急性耐性の発現には複数の メカニズムが関与することが示唆されてい る⁵⁾⁶⁾¹⁴⁾。耐性発現には異なったメカニズムが 種々の割合での寄与するために、検討するオ ピオイド作用の種類⁵⁾⁹⁾、オピオイドの投与量 ⁵⁾¹⁵⁾、オピオイドの種類そのもの⁷⁾など異な った条件下で耐性発現の特徴が異なってく ると考えられる。例えば、モルヒネよりアル フェンタニルでより急速に急性耐性が生じ る傾向が見られる⁷⁾。したがって、呼吸循環 作用に対する急性耐性が、モルヒネよりフェ ンタニルやレミフェンタニルでより速く出 現しても不思議ではないと思われる。

結語

レミフェンタンニルの持続投与中、その鎮 痛作用のみならず、呼吸循環作用に対しても 迅速に急性耐性が出現する。

引用文献

- Schmidt CF, Livingstone AE. The action of morphine on the mammalian circulation. J Pharmacol Exp Ther 1933; 47: 411-441.
- Martin WR, Eades CG. Demonstration of tolerance and physical dependence in the dog following a short-term infusion of morphine. J Pharmacol Exp Ther 1961; 133: 262-270.
- Cox BM, Ginsburg M, Osman OH. Acute tolerance to narcotic drugs in rats. Br J Pharmacol Chemother 1968; 33: 245-256.
- Kissin I, Brown PT, Robinson CA, Bradley, Jr. EL. Acute tolerance in morphine analgesia: Continuous infusion and single injection in rats. Anesthesiology 1991; 74: 166-171.
- Kissin I, Lee SS, Arthur R, Bradley EL Jr. Time course characteristics of acute tolerance development to continuously infused alfentanil in rats. Anesth Analg 1996; 83: 600-605.
- Kissin I, Bright CA, Bradley EL Jr. Acute tolerance to continuously infused alfentanil: The role of cholecystokinin and N-methyl-D-aspartate-nitric oxide systems. Anesth Analg 2000; 91: 110-116.
- Kissin I, Brown PT, Bradley EL Jr. Magnitude of acute tolerance opioids is not related to their

potency. Anesthesiology 1991; 75: 813-816.

- Vinik HR, Kissin I. Rapid development of tolerance to analgesia during remifentanil infusion in humans. Anesth Analg 1998; 86: 1307-1311.
- 9) Ling GSF, Paul D, Simantov R, Pasternak GW. Differential development of acute tolerance to analgesia, respiratory depression, gastrointestinal transit and hormone release in a morphine infusion model. Life Science 1989; 45: 1627-1636.
- Burkle H, Dunbar S, Aken HV. Remifentanil: A novel, short acting, μ-opioid. Anesth Analg 1996; 83: 646-651
- 林田真和,福永敦翁,目野亜希,小松郷子, 有田英子,花岡一雄,手術麻酔/鎮痛効果測 定のための動物モデル.JNRC Proceedings 22: 129-133, 2001
- 林田眞和,福永敦翁,目野亜希,関山裕詩, 有田英子,花岡一雄. ラビット手術麻酔モ デルの開発 - 超短時間作用性µ-agonist : remifentanilによる検討 - . JNRC Proceedings 23: in press, 2002
- McQuay HJ, Bullingham RES, Moore RA. Acute opiate tolerance in man. Life Sciences 1981; 28: 2513-2517.
- Knob GF, Bloom FE. Cellular and molecular mechanisms of drug dependence. Science 1988; 242: 715-724.
- Fennessy MR, Rattray JF. Cardiovascular effects of intravenous morphine in the anaesthetized rat. Eur J Pharmacol 1971; 14: 1-8.